

長野県酒類販売株式会社店舗建設に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

# 六反畠遺跡

1989年3月

長野県酒類販売株式会社  
長野県飯田市教育委員会

長野県酒類販売株式会社店舗建設に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

# 六 反 番 遺 跡

1989年3月

長野県酒類販売株式会社  
長野県飯田市教育委員会

## 序

飯田市鼎地区は、天竜川の支流飯田松川をはさみ飯田市街地と対峙し、昭和59年12月  
飯田市との合併前は下伊那郡鼎町であった。

鼎地区は、飯田市街地に接する地理的好条件下にあり、宅地あるいは様々な開発が急  
激に進行中である。特に、隣接する伊賀良地区に国道153号の飯田バイパスが開通し、  
それに連続する市道知久町中村線も整備されたことにより、その沿線が商工業地として  
経済効果の高い位置づけがなされるに至っている。そのため、市街地にある店舗が郊外  
進出する傾向が現われ、その一端として、今回の倉庫兼事務所の建設が計画され、それ  
に先立ち埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施したわけである。

地区内の各所に、縄文時代以来先人の生活した跡が認められ、今までに地区内の数カ  
所で遺跡の発掘調査が行なわれ、歴史事実のいくつかが明らかになっている。しかし、  
今回発掘調査した切石地区の東端部での調査例は少なく、調査実施の行為そのものが、  
また、調査の結果明らかになった事実のそれぞれが今後の地区あるいは当市の歴史研究  
に果す役割は多大であるといえる。

最後に、発掘調査に参加された方々の労苦をねぎらうとともに、今回は調査実施にあ  
たり、深いご理解とご協力を賜った長野県酒類販売株式会社をはじめとする関係各位に  
衷心よりお礼申しあげます。

飯田市教育委員会

教育長 福島 稔

## 例　　言

1. 本報告書は長野県酒類販売株式会社飯田支店店舗建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は飯田市教育委員会が長野県酒類販売株式会社の協力を得て実施した。
3. 発掘調査および整理作業において一貫して遺跡名に略号RTBを用いた。
4. 本書の記載については住居址を優先し時代順を原則とした。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
5. 本書は、調査員全体で検討の上、馬場保之が執筆、編集を行ない、小林正春が総括した。
6. 本書に掲載した図面類の整理、遺物の実測は馬場が行ない、佐々木嘉和、佐合英治、吉川豊、小平不二子、木下玲子、福沢育子、吉川悦子、田中恵子、川上みはる、林勢紀子が補佐した。
7. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表わしている
8. 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕は縦線で、節理面は斜線でまた漬しあは破線で実測図外に、それぞれ表現した。
9. 本書に関する出土品および諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

## 目 次

序	
例 言	
目 次	
I 調査の経過 .....	1
1. 調査に至るまでの経過 .....	1
2. 調査の経過 .....	1
3. 調査組織 .....	2
II 遺跡の環境 .....	3
1. 自然環境 .....	3
2. 歴史環境 .....	3
III 調査の結果 .....	9
1. 壺穴住居址 .....	9
① 1号住居址   ② 2号住居址	
2. 土 坑 .....	11
① 土坑1 ② 土坑2 ③ 土坑3 ④ 土坑4 ⑤ 土坑5	
⑥ 土坑6 ⑦ 土坑7 ⑧ 土坑8 ⑨ 土坑9 ⑩ 土坑10	
⑪ 土坑11 ⑫ 土坑12 ⑬ 土坑13 ⑭ 土坑14 ⑮ 土坑15	
⑯ 土坑16 ⑰ 土坑17 ⑱ 土坑18 ⑲ 土坑19 ⑳ 土坑20	
㉑ 土坑21 ㉒ 土坑22 ㉓ 土坑23 ㉔ 土坑24 ㉕ 土坑25	
㉖ 土坑26 ㉗ 土坑27 ㉘ 土坑28 ㉙ 土坑29 ㉚ 土坑30	
㉛ 土坑31 ㉜ 土坑32 ㉝ 土坑33 ㉞ 土坑34 ㉟ 土坑35	
㉛ 土坑36 ㉜ 土坑37 ㉝ 土坑38 ㉞ 土坑39 ㉟ 土坑40	
㉛ 土坑41 ㉜ 土坑42 ㉝ 土坑43 ㉞ 土坑44 ㉟ 土坑45	
㉛ 土坑46 ㉜ 土坑47 ㉝ 土坑48 ㉞ 土坑49 ㉟ 土坑50	
㉛ 土坑51 ㉜ 土坑52 ㉝ 土坑53 ㉞ 土坑54 ㉟ 土坑55	
㉛ 土坑56 ㉜ 土坑57 ㉝ 土坑58 ㉞ 土坑59 ㉟ 土坑60	
㉛ 土坑61 ㉜ 土坑62 ㉝ 土坑63 ㉞ 土坑64 ㉟ 土坑65	
㉛ 土坑66 ㉜ 土坑67 ㉝ 土坑68	
3. 柱穴群 .....	24
4. 造構外出土遺物 .....	25
(1) 繩文時代	

①土器 ②石器 ③土製品	
(2) 弥生時代 .....	29
(3) 古墳時代 .....	29
(4) 中・近世 .....	30
①陶器・磁器 ②鉄製品	
IVまとめ .....	31
引用参考文献 .....	33

## 挿 図 目 次

挿図 1. 調査遺跡及び周辺遺跡位置図 .....	4
挿図 2. 調査位置及び周辺地図 .....	5
挿図 3. 調査区土層柱穴図 .....	7
挿図 4. 遺構全体図 .....	8
挿図 5. 1・2号住居址 .....	10
挿図 6. 土坑・柱穴平面図(1) .....	12
挿図 7. " (2) .....	13
挿図 8. " (3) .....	18
挿図 9. " (4) .....	22

## 図 版 目 次

第1図 遺構出土遺物(1)(1. 土3、2~6. 土6、7~9. 土7) .....	36
第2図 遺構出土遺物(2)(1. 土8、2. 土16、3. 土18、4. 土26) .....	37
5. 土40、6. 土64、7. 土68)	
第3図 遺構外出土土器(1) .....	38
第4図 " (2) .....	39
第5図 " (3) .....	40
第6図 " (4) .....	41
第7図 " (5) .....	42
第8図 " (6) .....	43
第9図 " (7) .....	44
第10図 " 土製品 .....	45
第11図 " .....	46

第12図	遺構外出土石器 (1)	47
第13図	" (2)	48
第14図	" (3)	49
第15図	" (4)	50
第16図	" (5)	51
第17図	" (6)	52
第18図	" (7)	53
第19図	" (8)	54
第20図	" (9)	55
第21図	遺構外出土石器、鉄製品	56

## 写真図版目次

- 図版1 六反畠遺跡全景  
 図版2 1・2号住居址  
 図版3 土坑8~16. 柱穴、土坑25・42~57. 柱穴  
 図版4 土坑28~39. 柱穴、土坑7・18~24・26  
 図版5 土坑44・52・53・55・58~63. 柱穴、遺物出土状態  
 図版6 遺物出土状態  
 図版7 遺構出土遺物  
 図版8 遺構外出土土器 (1)  
 図版9 " (2)  
 図版10 遺構外出土土製品、遺構外出土土器  
 図版11 遺構外出土石器 (1)  
 図版12 " (2)  
 図版13 " (3)  
 図版14 " (4)  
 図版15 " (5)  
 図版16 " (6)  
 図版17 " (7)  
 図版18 " (8)  
 図版19 " (9)  
 図版20 遺構外出土石器、鉄製品  
 図版21 調査風景

# I 調査の経過

## 1. 調査に至るまでの経過

高速交通時代の到来とともに、近年飯田市は、急速に道路環境が整備されつつあり、とくに市街地の渋滞緩和を目指し、中央自動車道とアクセスする一般国道153号飯田バイパス建設が急ピッチで進められている。また、飯田市街地と西部地域を結ぶ市道知久町中村線が昭和62年度完成し、該地域の振興、整備が図られつつある。

一方すでに飯田市街地は過密化を極め、事業所の新設・更新等困難に陥っており、同時に、無秩序に市街地が旧市街周辺に拡大しつつあり市街地のドーナツ化が進行しつつある。こうした事情を背景に、道路環境が整備されつつある伊賀良、鼎方面に進出する事業所が増加しており、長野県酒類販売株式会社の支店移転もその一つといえる。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地、六反田遺跡・日向田遺跡と隣接しており、日向田遺跡においては昭和60年度の市道知久町中村線建設に伴なう緊急調査の折、平安時代の堅穴住居址1軒が検出された経緯がある。そこで昭和63年4月19日県教育委員会文化課の立会いを受け現地協議を実施した結果、とりあえず試掘調査を行なうこととなった。

同4月21・22日の両日、敷地にT字状の2本の試掘坑を設定し調査した結果、西側の試掘坑にかかって焼土を伴なう土坑と、多数の繩文時代後期から晩期の遺物が検出された。

試掘調査の結果に基づいて、現地において関係者が協議を行ない、敷地の南西部部分600m<sup>2</sup>について本調査を実施することになった。

## 2. 調査の経過

諸協議の結果に基づき、5月25日本調査に着手した。重機により耕土を除去した後、遺構の検出作業を行なった。その結果調査区東端中央に2軒の堅穴住居址、その南西に土坑群が検出され、順次掘り下げた後、写真撮影、実測作業を実施し、6月18日現地調査を終了した。なお調査期間中、雨天が続き、調査の進展は思うにまかせなかった。

引き続き、飯田市考古資料館において、水洗・注記・接合・復元作業、現地で記録した図面・写真類の整理作業、実測および写真撮影を行ない、報告書作成にあたった。

### 3. 調査組織

#### (1) 調査団

調査担当者 小林 正春

調査員 佐々木嘉和 佐合 英治 吉川 豊 馬場 保之

作業員 向田 一雄 今村 春一 森 章 高木 義治 平沢今朝光 齋田多久三

中平 隆雄 市原 千里 福沢トシ子 坂下やすゑ 正木実重子 市瀬 悅子

吉川 正実 篠田 道夫 北村 重実 清水 成彦 清水 精子 松下 直市

高橋牧二郎 池田 幸子 小平不二子 吉川紀美子 橋原 勝子 吉川 悅子

武田 恵美 木下 玲子 宮内真理子 唐沢古千代 丹羽 由美 松本 恵子

川上みはる 田中 恵子 林 勢紀子 佐々木美千枝 福沢 育子 松下ひろ子

河尻真美珠 吉沢まつ美 岡本 恵巳 小林百合子

#### (2) 事務局

事務局長 竹村 隆彦（飯田市教育委員会社会教育課長）

事務局員 中井 洋一（ “ “ 文化係長）

小林 正春（ “ “ 文化係）

吉川 豊（ “ “ “ “ ）

馬場 保之（ “ “ “ “ ）

土屋 敏美（ “ 庶務課）

## II 遺 跡 の 環 境

### 1. 自然環境

六反畠遺跡は飯田市鼎切石、上山地籍に所在する。

飯田市は長野県南部、天竜川中流域に位置し、東側は伊那山地、南アルプス、西は中央アルプスに挟まれた綿長の盆地である。天竜川の両岸は段丘が発達し、上位段丘は山麓からの押し出しにより扇状地がかぶり、また各段丘は天竜川各支流により開析され複雑な地形が展開する。

鼎地区は飯田市街地の南側に位置し、飯田松川に沿った細長い地域で、南側は伊賀良地区、東側は松尾地区、下伊那郡上郷町に接する。地形は複雑な変化をみせるが、大まかに三つの段丘面で構成されており、いずれも松川に併行している。

六反畠遺跡は低位段丘の切石・上山面上に立地する。この面の南側は300m程で比高25m程の段丘崖に至り、崖下に湧水線が存在する。北側は約20mで比高差約10mの低位段丘に接する。切石・上山面上には松川の氾濫堆積に伴なう微高地が存在し、この微高地上に遺跡が立地する。六反畠遺跡の北側及び南隣の微高地上に位置する日向田遺跡の南側は花崗岩の巨礫が多くあり、段丘面の南側及び北側が大きな氾濫を被ったことを示している。一方両遺跡の間は厚く黒色土層が発達しており集落經營の基盤となつた湧水地帯であったと考えられる。

今次調査地点は六反畠遺跡東側の微高地南東縁辺に位置し、土層柱状図（挿図3）にみる如く黒色土、漆黒土の発達した湧水地帯から砂礫混りの微高地に移行する際にあたる。地形的諸条件に恵まれ、生活を営むに適した地であったといえよう。

### 2. 歴史環境

鼎地区は飯田市街地に隣接し、道路環境が整備されつつあることから、近年急速に宅地化が進行し、事業所の進出が相次いでいる。また中・低位段丘における土地利用は水田經營がなお多く埋蔵文化財包蔵地の位置、範囲も不明瞭になりつつある。しかし、松川沿いの最低位の沖積面、段丘崖や台地中央を除いた各所に、松川の水利や湧水線を利用した遺物散布地、遺跡の広がりが認められ、先史以来連続と人々が生活を営んできたことが知れる。現在32遺跡と14基の古墳が知られている。既に調査された遺跡は代田・山岸・天伯B・天伯A・猿小場・矢高原・八幡原・黒河内・日向田・田井座の各遺跡で、調査された遺跡が少なく尚不明な点も多いが、時代を追って概観しておく。

旧石器時代に比定される遺跡はないが、天伯B遺跡・猿小場遺跡からはナイフ形石器と思われ



- 1. 六反畠遺跡 2. 日向田遺跡 3. 黒河内遺跡 4. 猪小場遺跡 5. 天伯A遺跡
- 6. 田井座遺跡 7. 殿原遺跡 8. 上の金谷遺跡 9. 三森瀬遺跡 10. 中島平遺跡
- 11. 宮の先遺跡 12. 丸山遺跡 13. 飯田城址 A. 酒屋前遺跡 B. 滝沢井尻遺跡
- C. 小垣外遺跡 D. 山岸遺跡 E. 天伯B遺跡 F. 権現堂前遺跡 G. 古屋垣外遺跡

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



挿図2 調査位置及び周辺地図

るものがそれぞれ出土しており、先人の足跡は旧石器時代までたどることができる。

縄文時代早期は天伯A遺跡遺構外出土押型文土器片のほか採集資料が多く、不明な点が多いが、前期になると、集落の実態を示す資料が得られている。中位段丘上に位置する一色地籍、田井座遺跡では前期初頭の竪穴住居址5軒が微高地に並んで確認された。

次の中期になると、低位段丘の天伯A遺跡で集落の一画が調査されたほか、日向田・柳添・代田遺跡等各所から該期の良好な資料が得られている。後期晩期は各遺跡で断片的な資料の出土はあるが、遺構等に伴なった例はほとんどなく具体的な状況は不明である。

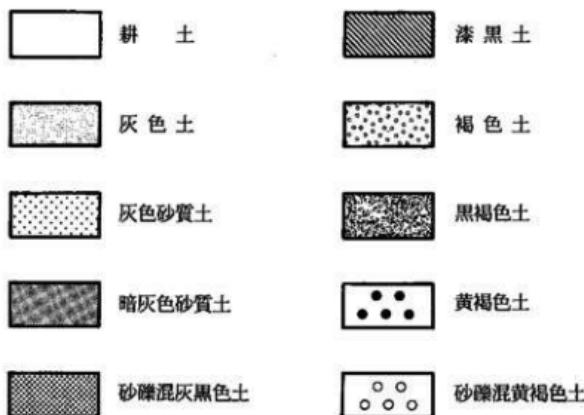
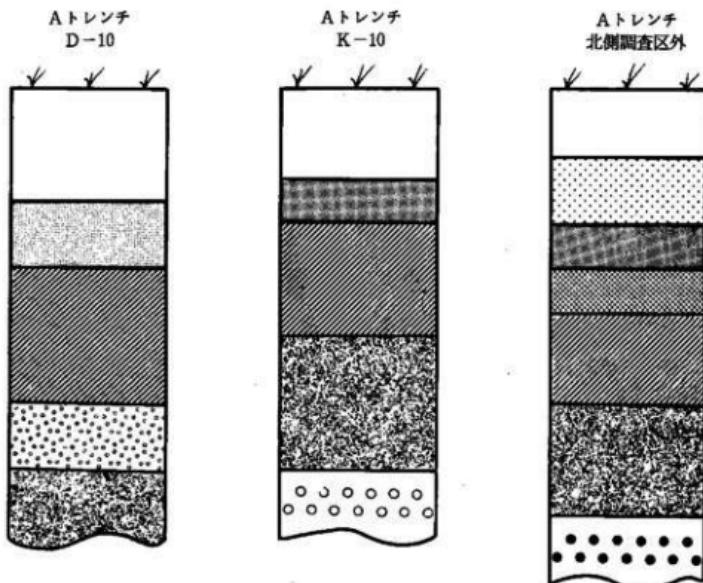
弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変らず、低・中位段丘の湧水線を利用した水田經營および陸耕を基盤とした集落展開が考えられる。山岸・天伯B遺跡の大集落の存在・田井座・猿小場遺跡などの小規模集落の存在などが知られる。殊に気賀沢川を挟んで対峙する田井座遺跡と殿原遺跡の集落景観の相違は注目される。

古墳時代では天伯B・山岸・黒河内遺跡において集落址が調査され、当地方における古墳時代集落の代表的な方示している。古墳は約半数が現存し、松川に沿った低位段丘上および台地端に立地している。集落規模の拡大、古墳築造の背景には生産基盤の拡大があったことが考えられる。

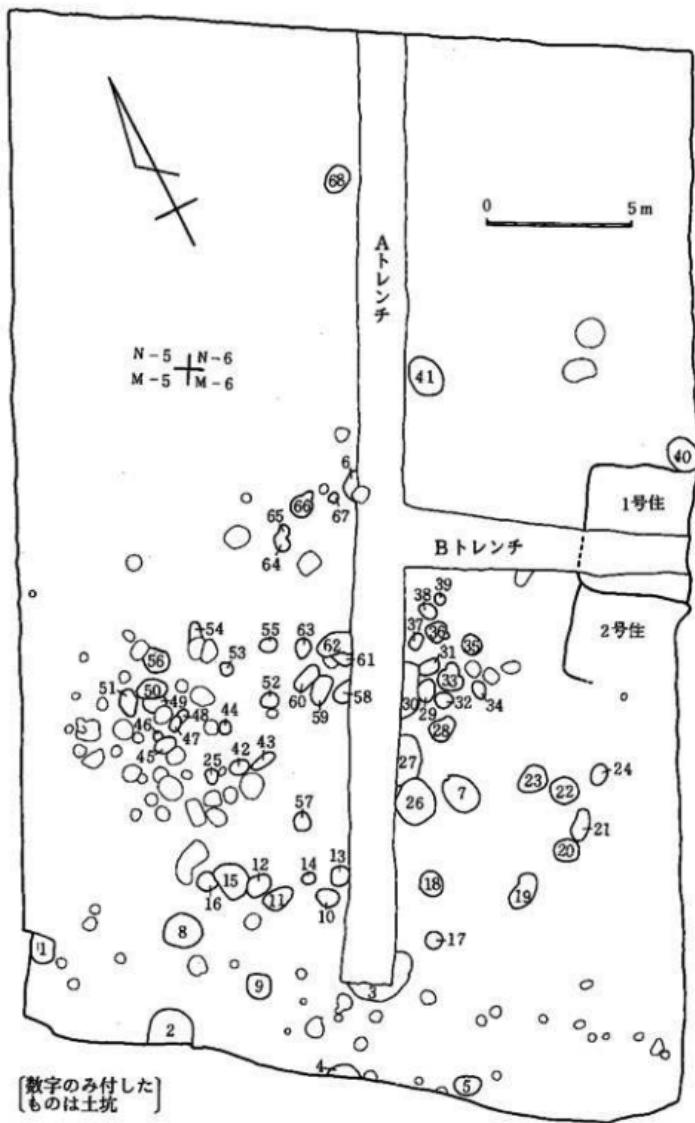
平安時代の遺跡としては猿小場・日向田遺跡が調査されており、猿小場遺跡では八世紀後半を中心に25軒の竪穴住居址が検出された。

中世には鼎地区は伊賀良庄の一部に含まれていたと考えられ、室町時代には松尾城に拠った小笠原氏の基盤であったと思われる。猿小場遺跡からは竪穴住居址16軒のほか、溝址や集石列群が検出されている。また鼎地区の中・低位段丘の各所から広範にわたり中世の陶磁器類が採集されることも注意される。

本遺跡の立地する段丘上の微高地の遺跡を中心に各時代を概観したが、縄文時代以来基本的に変わらない遺跡立地の中で、生産基盤を含めた先人の生活の舞台が拡大されていった様子が窺える。



挿図3 調査区土層柱状図



插図4 造構全体図

### III 調査の結果

今次の調査において確認された遺構は以下のとおりである。

豊穴住居址 2軒  
土 坑 68基  
柱穴群

#### 1. 豊穴住居址

##### ① 1号住居址（擲図5）

2号住居址を切って確認された。遺構検出は漆黒土上面で、本住居址上部はほとんどとばされており、床面まで10cm程残っていた。隅丸方形を呈すると思われる豊穴住居址で、珪畔にかかり東壁は確認できなかったが、南北方向は4.4mを測る。主軸方向N59.5°Wを示す。床面ははり床されれば平坦であり、北壁に沿って部分的に硬い。検出面から床面まで浅いため壁の立ち上がりの様子は判然としないが、北壁東半はだらだらしており明確な立ち上がりを示さない。周溝は南壁西間に痕跡的に検出されたのみで、壁下より僅かに内側に寄る。主柱穴は2本検出したのみで、深さ26、35cmを測る。残りの2本はBトレーニングにかかり検出できなかった。南壁際に少々炭が混る。また南西隅より赤色顔料が微量ながらも検出された。西壁中央よりやや北側にカマドが設けられている。両袖に粘土が僅かに残存し、はり床をはずした後、左袖に袖石を据えた痕跡が確認されたことから石芯粘土カマドと思われる。また焚き口中央に粘土塊が検出された。煙道部分は灰が多く炭が混り、殊に煙道前面は焼土が多く認められた。検出の状況から遺物の遺存状態は良好ではないが、土師器壺のほかピット覆土から壺片、はり床下から須恵器壺片が出土した。出土遺物は、須恵器疊ないし長頸瓶の口縁小破片、土師器壺、壺、高壺の小破片があるが、いずれも器形の知れるものはない。

出土遺物等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

##### ② 2号住居址（擲図5）

1号住居址に切られる。上部はほとんど削平をうけ西壁を検出したにとどまる。隅丸方形を呈すると思われるが、規模、主軸方向等詳細は不明である。漆黒土まで掘り込んだ後灰黑色砂質土のはり床がなされるが、床面は西壁下の一部を検出したにとどまる。堅くよく締っている。2号住居址につくと思われるピットは埋土が黒褐色土の11個があるが、主柱穴は不明である。出土遺

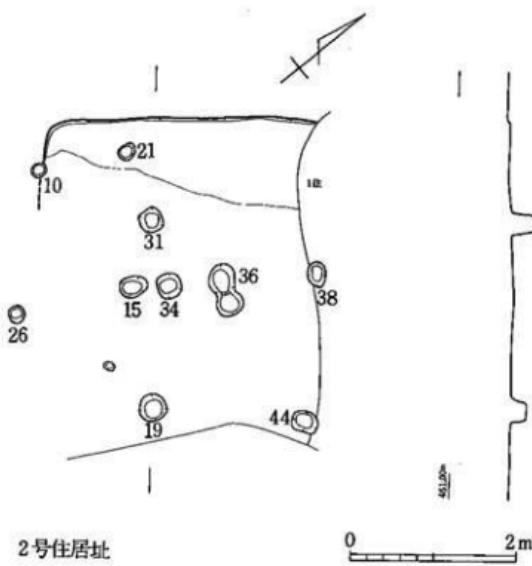
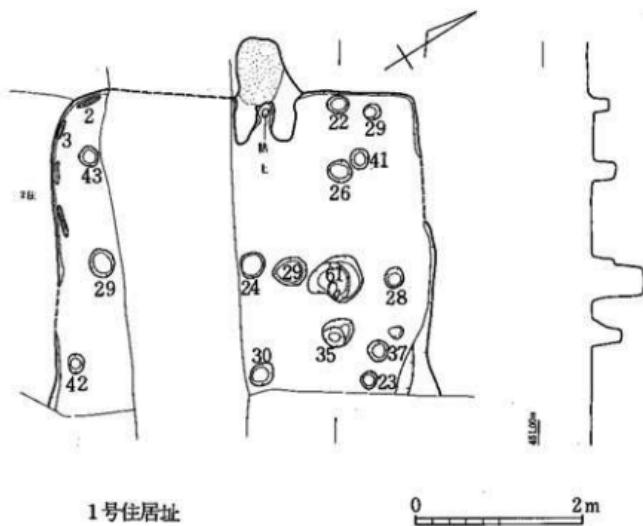


插图5 1・2号住居址

物は極めて少なく土師器片等が出土した。年代は古墳時代に比定されるが重複関係等から1号住居址より古いことは確かであるが、詳細時期は不明である。

## 2. 土 坑

### ① 土坑1（挿図6）

85×80cm、深さ54cmの不整方形を呈する土坑である。中段で一旦傾斜が緩やかになり、さらに一段窪む。

### ② 土坑2（挿図6）

全体を調査しておらず、全体形は不明であるが、一辺約160cmの不整円形を呈すると思われる。深さ17cmの断面皿状を呈する浅い土坑で、壁はゆるやかな立ち上がりを示す。

### ③ 土坑3（挿図7、第1図1）

Aトレンチの南端にかかっており、全体形は把握できなかったが、約220×160cm、深さ12cmの不整椭円形を呈するものと思われる。本址底部は凹凸が激しく平坦でなく、西壁寄りに一段低く窪む部分がある。本址より中世に位置づく山茶碗系の环口縁部片1点が出土したほか、洞中央に鏡をもつ土師器環、無文の繩文土器小破片が4点混入出土した。

### ④ 土坑4（挿図7）

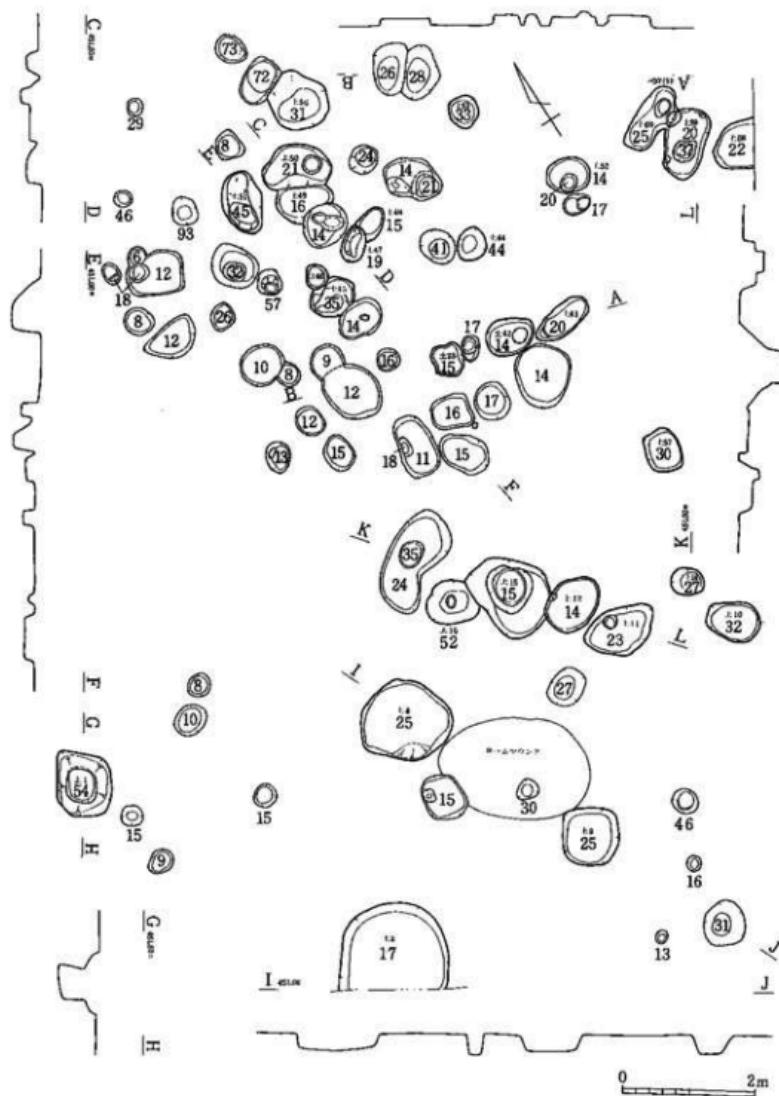
半分以上は調査区外にかかり未調査であり全体形は不明である。底部は平坦でなく西側で最深を測り、東壁に向ってゆるやかに立ち上がっている。

### ⑤ 土坑5（挿図7）

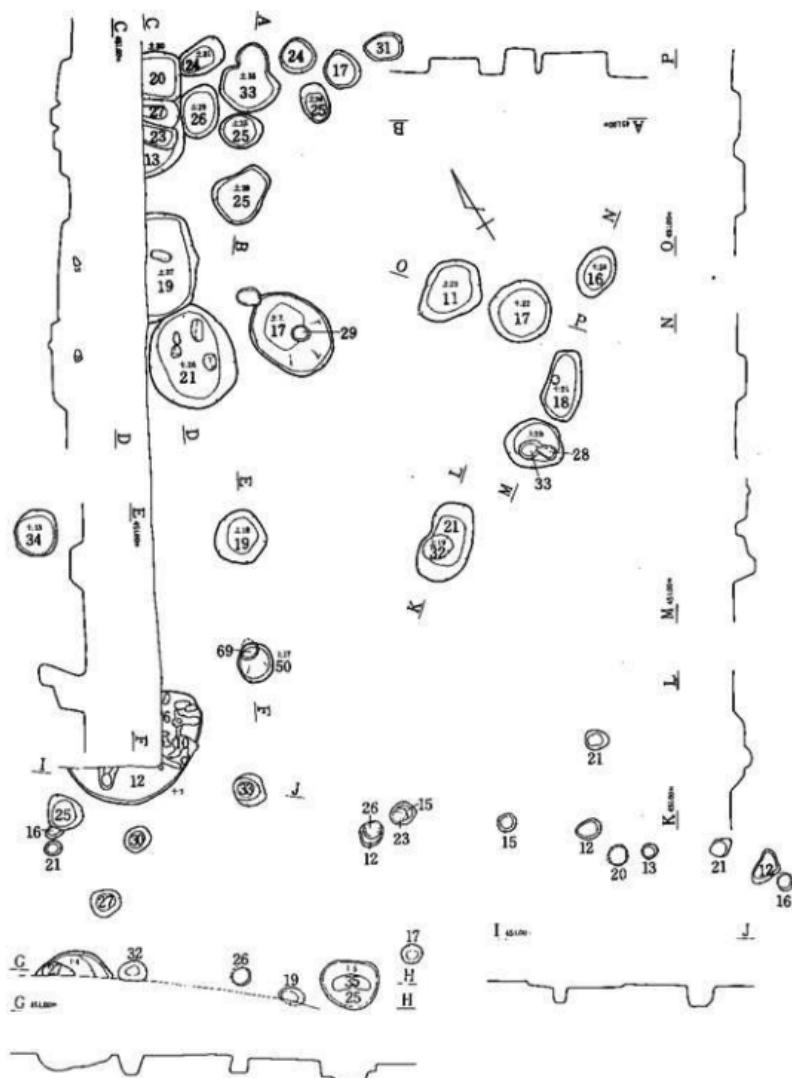
90×75cm、深さ25cmの不整円形を呈する。壁は垂直に近い立ち上がりを示し、内部はさらに一段深くなっている。出土土器は沈線の施文された1点のほか無文のもの5点が出土しているが、いずれも小破片ばかりで、繩文時代後期に位置づくことのほか詳細は不明である。

### ⑥ 土坑6（挿図9、第1図2～6）

径約100cm、深さ36cmの円形を呈すると思われる土坑であるが、Aトレンチにかかっており全体形は不明である。壁は急な立ち上がりを示し、底部は更に一段低くなっている。坑内より焼土が多量に検出された。二つの土坑が重複する可能性もある。本址出土遺物には口縁部が外反し洞上部が膨らむ深鉢、無文の粗製深鉢、燃糸文施文の深鉢がある。2は後期前葉の土器で磨消繩文



挿図6 土坑・柱穴平面図(1)



挿図7 土坑・柱穴平面図(2)

の無文部に刺突文が充填される。以下は縦方向の丁寧なミガキ調整が施される。内面は接合痕を顯著に残し、下間に炭化物が付着する。無文土器のうち1点は内外面ともに横方向にミガキ調整が施され、いざれも石英、雲母等多量に含む。撻糸文施文の土器は口縁に突起を有する。出土遺物等から本址の所属時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

#### ⑦ 土坑7（押図7、第1図7～9）

145×105cm、深さ17cmの不整橢円形を呈する土坑で、壁上部は急な立ち上がりを示すものの、底部はなだらかに窪み、中央は20×30cmの稍円状に一段低くなる。出土遺物としては以下のものがある。有文土器では入組文施文の器面の著しく荒れた土器（9）、縄文時代早期細久保式土器に比定される橢円文施文の土器（8）がある。後者は内面丁寧な調整が施され、外面は口縁部横位、以下右上がり斜位の施文等不規則走行施文されている。出土状況等から混入と考えられる。無文の深鉢形土器（7）は上部に開く器形で、器面はやや凹凸がある。外面胴上半は横方向以下縦方向のケズリによる調整痕を明瞭に残し、一部光沢を帯びる。内面は幅広のナデ痕がみられ、殊に胴以下に顯著である。他に黒曜石小剣片が出土した。本址の年代は縄文時代後期中葉に比定される。

#### ⑧ 土坑8（押図6、第2図1）

ロームマウンドに接して検出された。130×120cm、深さ25cmの不整形な土坑で、南壁の一部がなだらかに落ちるほかは、急な立ち上がりを示す。埋土上層に薄く炭・焼土混りの黒色土が認められた。本址より打製石斧1点が出土した。両側縁並びに基部に潰しが施され、自然面を多く残し、粗い剥離により整形された肉厚の石斧である（1）。硬砂岩製で、刃部を欠損する。ほかに無文土器小破片、砂岩製打製石器欠損品1、黒曜石剣片等が出土した。

#### ⑨ 土坑9（押図6）

ロームマウンドに接して検出された、85×85cm、深さ25cmの不整方形を呈する土坑である。壁はやや急に立ち上がる。石英等の砂粒を多く含み器面の荒れた無文の粗製深鉢が出土した。縄文時代後期に属するが、詳細は不明である。

#### ⑩ 土坑10（押図6）

80×60cm、深さ32cmの不整形の土坑で、壁は急な立ち上がりを示す。埋土上層に厚く焼土の堆積を認める。本址より横刃型石器および無文土器片が出土しているが、詳細時期は不明である。

#### ⑪ 土坑11（押図6）

110×70cm、深さ23cmの不整形の土坑である。壁はややゆるやかな立ち上がりを示し北壁際

が一段低くなる。本址からは磨消繩文施文の土器のはか、無文土器片4、底部小片1、黒曜石剣片1が出土した。底部破片は2本超え1本潜り右1本送りの網代痕が看取される。出土遺物から繩文時代後期中葉に比定される。

⑫ 土坑12（挿図6）

土坑15を切る。90×70cm、深さ14cmの不整梢円形、断面皿状を呈する。出土遺物に無文土器小片3片、黒曜石剣片1点があるが、詳細時期等不明である。

⑬ 土坑13（挿図7）

径約70cm、深さ34cmの不整円形を呈し、壁は急な立ち上がりを示す。本址からは、折損したチャート剣片1、無文土器小片8が出土したのみで詳細時期は不明である。

⑭ 土坑14（挿図6）

50×40cm、深さ27cmの不整梢円形を示し、西壁がゆるやかに立ち上がる片上がりの土坑である。無文の粗製深鉢口縁部片1点が出土した。

⑮ 土坑15（挿図6）

土坑12に切られ、土坑16と重複する。130×100cm、深さ63cmの不整形の土坑で、断面漏斗状を呈する。内外面ともに赤褐色を呈する無文土器小片1片が出土したにとどまる。

⑯ 土坑16（挿図6、第2図2）

土坑15と重複して検出された。80×65cm、深さ34cmの不整梢円形を呈し、底部中央に15×10cm程度の小穴をもつ。壁はゆるやかに立ち上がる。2は小波状を呈する鉢形土器で、波頂下に逆T字状の抉りが付される。節の細かい繩文による磨消繩文手法であり、内面丁寧なミガキが施される。出土遺物から繩文時代後期後葉に比定される。

⑰ 土坑17（挿図7）

60×55cm、深さ50cmの不整梢円形を呈する。北壁側は上部が張り出しており、底部はこれに寄っている。また南壁はゆるやかな立ち上がりを示す。本址より沈線文の施された小破片1の他無文土器6片が出土しており、繩文時代後期前葉に比定される。

⑱ 土坑18（挿図7、第2図3）

径約80cm、深さ19cmの不整梢円形を呈し、断面形はゆるやかな立ち上がりを示す皿状である。第2図3は脛部中央に屈曲をもつ鉢形土器で、おそらく4単位の張り出しをもつ。屈曲部には隆

帶に刺突が施され、その上位は磨削繩文、下位は丁寧なミガキ調整が施される。他に網代痕をもつ底部片、無文土器小破片、硬砂岩、黒曜石剝片各1等が出土した。所属時期は縄文時代後期中葉と考えられる。

#### ⑩ 土坑19（押図7）

長軸125cm、短軸75cm、深さ21cmの不整形の土坑である。壁はゆるやかな立ち上がりを示し、底部45×40cm程一段と窪む。本址からは台付鉢台部、多数の無文土器小破片、チャート小剝片が出土した。台付鉢はくびれ部に隆起が貼付され、さらに刺突が施されるが、器面は著しく荒れている。出土遺物等から縄文時代晚期前葉に比定される。

#### ⑪ 土坑20（押図7）

85×75cm、深さ33cmの不整梢円形を呈する土坑で、ボウル状に窪み南壁際は更に一段低い。出土遺物は無文土器小片20余片のほか、刺突の施された突起を有し口唇の沈線とその直下の屈曲部に刻みの施された鉢形土器片がある。縄文時代後期中葉に比定される。

#### ⑫ 土坑21（押図7）

長軸105cm、短軸60cm、深さ18cmの不整長梢円形の土坑で、断面皿状を呈する。底部中央西壁寄りに僅かに窪む。無文土器小片13点が出土したほか、時期の知れる遺物はない。

#### ⑬ 土坑22（押図7）

径約90cm、深さ17cmのはば円形を呈する土坑で、断面は逆台形である。無文土器小片7が出土した。

#### ⑭ 土坑23（押図7）

長軸110cm、短軸90cm、深さ11cmの不整形の土坑で、壁はゆるやかな立ち上がりを示す。出土遺物はない。

#### ⑮ 土坑24（押図7）

長径80cm、短径55cm、深さ16cmの平面梢円形断面皿状を呈する土坑である。朱彩された磨消縄文施文の鉢形土器片のほか無文土器片が出土した。遺物から縄文時代晚期前葉に比定される。

#### ⑯ 土坑25（押図6）

50×40cm、深さ15cmの不整方形の土坑で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。無文土器4片が出土した。

㉙ 土坑26（挿図7、第2図4）

土坑27と重複する155×125cm、深さ21cmの椭円形を呈する土坑で、ややゆるやかな壁をなす。坑内に、20~30cmの礫がある。出土遺物は無文土器脚部小片および底部片、石皿、チャート製削片、敲打痕ある花崗岩片がある。底部片は不明瞭ながら木葉痕を残す。石皿は花崗岩製で、全体の約半分を欠損するが、上面全体に顕著な擦痕が認められる。火を受け一部赤変している。

㉚ 土坑27（挿図7）

Aトレンチに約半分かかり全体形は不明であるが確認された一辺は170cmを測る。深さ19cm断面皿状を呈するが、底部南側がやや低くなる。無文土器3片が出土した。

㉛ 土坑28（挿図7）

95×75cm、深さ25cmの不整形の土坑である。本址からは鉢形土器片、壺形土器片、無文土器片、底部片および黒曜石剝片が出土した。鉢形土器は第4図4と同じ文様をもち、口縁外縁に縦の貼瘤がなされる。細かい節のLR繩文が横位施文された朱彩土器である。壺形土器は粗いミガキの施された磨消繩文土器で、黒色を呈する。無文土器片の中に内面に細かい条線の認められるものがある。底部破片は不明瞭ながら網代痕をとどめる。出土遺物から繩文時代晚期前葉に比定される。

㉜ 土坑29（挿図7）

85×60cm、深さ26cmの不整椭円形を呈する土坑で土坑30と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物は外面に調整痕をとどめる無文土器片2がある。

㉝ 土坑30（挿図7）

Aトレンチにかかり全体形は不明であるが、確認された1辺は185cmを測る。土坑29・31と重複する。底部は3つに窪んでおり、土坑の重複の可能性もある。無文土器4片が出土した。

㉞ 土坑31（挿図7）

80×45cm、深さ24cmの不整椭円形を呈する土坑で、土坑30と重複する。出土遺物は無文土器4片である。

㉟ 土坑32（挿図7）

65×55cm、深さ42cmの不整椭円形を呈する土坑で、壁は急な立ち上がりを示す。無文土器片1の他、緑色岩製の横刃型石器が出土した。

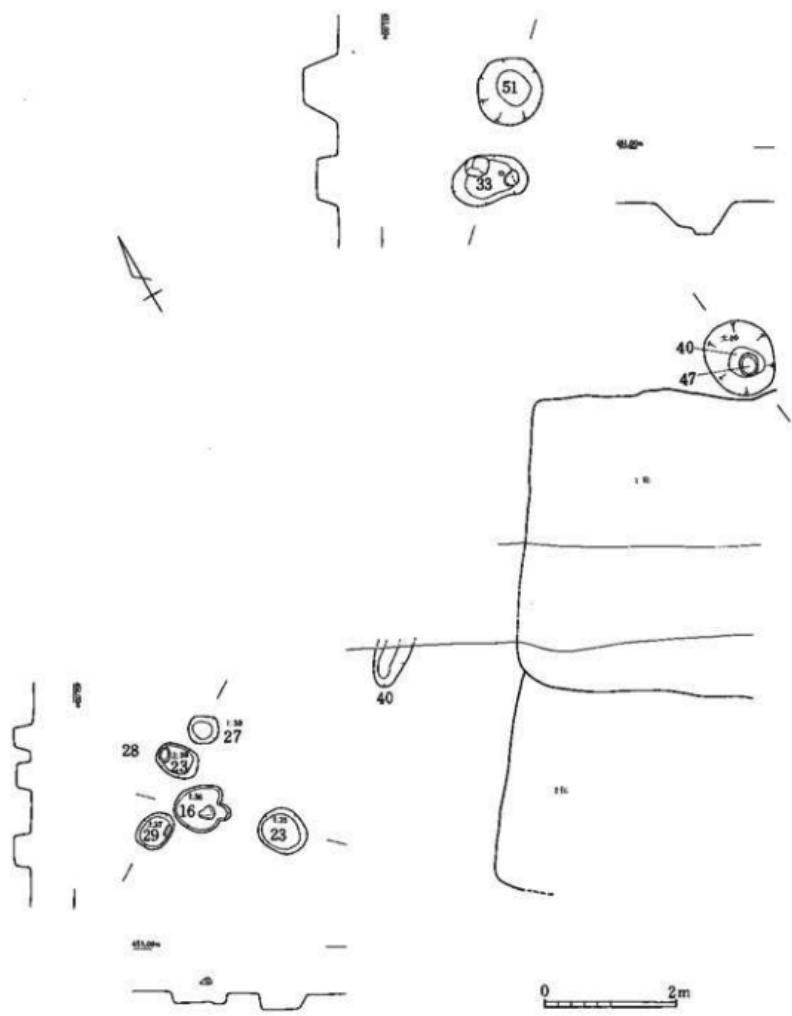


插圖 8 土坑・柱穴平面圖 (3)

⑬ 土坑33（挿図7）

柱穴と重複し全体形は不明であるが、確認された1辺は50cm、深さ38cmを測る。無文土器1片が出土した。

⑭ 土坑34（挿図7）

65×40cm、深さ25cmの不整椭円形を呈する土坑で、北壁はゆるやかな立ち上がりを示す。本址からは無文土器1片の出土をみた。

⑮ 土坑35（挿図8）

70×60cm、深さ23cmの不整椭円形を呈する土坑で、壁はややゆるやかな立ち上がりを示す。出土遺物はない。

⑯ 土坑36（挿図8）

80×70cm、深さ16cmの不整形を呈する土坑で、上部に25cm程度の疊がある。小柱穴と重複するが、新旧関係は不明である。本址からは無文土器5片が出土しており、うち1つは浅鉢で洞部上半で最大径をもつ。また内面黒色を呈し、外面に細かいミガキ調整痕を残す深鉢1点がある。出土遺物から縄文時代後期に位置づけられるが、詳細時期は不明である。

⑰ 土坑37（挿図8）

60×45cm、深さ29cmの不整椭円形を呈する。底部に20cm程の石が入る。無文土器2片が出土した。

⑱ 土坑38（挿図8）

65×45cm、深さ23cmの不整椭円形を呈する。底部西壁下が一段深く掘り込まれている。出土土器は、いずれも小破片のみで、無文土器片のほか、磨消縄文施文の厚手の土器1片がある。本址の年代は縄文時期後期中葉に比定される。

⑲ 土坑39（挿図8）

45×40cm、深さ27cmの不整方形を呈する土坑で、壁はややゆるやかな立ち上がりを示す。本址からは鉄石英を胎土に混入した無文土器1片が出土した。

⑳ 土坑40（挿図8、第2図5）

115×100cm、深さ40cmの不整椭円形を呈する土坑で、壁はゆるやかな立ち上がりを示し、中央が一段深く掘り込まれている。第2図5は、口唇及び口縁直下に細かい円形刺突列が施され、

その下位に入組文風の磨消繩文が施文される。器面は荒れている。ほかに無文土器4片が出土し、うち3片は赤褐色を呈し、焼成も良好である。出土遺物から繩文時代後期中葉に比定される。

⑪ 土坑41（挿図9）

135×105cm、深さ30cmの精円形を呈する。壁はややゆるやかな立ち上がりを示し、覆土に炭が混じる。本址からは無文の粗製深鉢、底部破片が出土した。深鉢は内面に横方向の調整痕が認められ、とくにケズリによる器面の荒れが目立つ。底部片は2本超え1本潜り右1本送りの綱代痕を残す。

⑫ 土坑42（挿図6）

75×55cm、深さ14cmの不整梢円形を呈し、底部東壁寄りが一段低く窪む。本址より内面横方向外縦方向に細かい条線を施した土器片1片が出土した。

⑬ 土坑43（挿図6）

90×40cm、深さ20cmの不整形の土坑で、西壁に一つ段をもつ。無文土器2片が出土した。

⑭ 土坑44（挿図6）

55×45cm、深さ44cmの不整形の土坑である。無文土器2片が出土した。

⑮ 土坑45（挿図6）

70×50cm、深さ14cmの梢円形を呈する。土坑46に切られる。坑内より器厚の厚い無文土器2片が出土した。

⑯ 土坑46（挿図6）

35×35cm、深さ26cmの不整形を呈し、土坑45を切る。覆土は灰色砂質土である。

⑰ 土坑47（挿図6）

50×35cm、深さ19cmの不整形を呈し、北壁下部はだらだらと落ち込む。土坑48を切る。無文土器1片が出土した。

⑲ 土坑48（挿図6）

55×35cm、深さ15cmの不整形を呈する土坑で、土坑47に切られる。本址より口唇に押圧の施される無文土器1点が出土した。所属時期は繩文時代後期後葉に比定される。

④ 土坑49（挿図6）

85×約60cm、深さ16cmの不整橢円形を呈する。土坑50と重複するが、新旧関係は不明である。無文土器1片が出土したにとどまる。

⑤ 土坑50（挿図6）

105×約70cm、深さ21cmを測る不整形の土坑である。南壁はゆるやかな立ち上がりを示す。土坑49と重複するほか、径約25cmの柱穴と重複するが、いずれも新旧関係は不明である。本址より内外面赤褐色を呈する無文土器1片が出土した。

⑥ 土坑51（挿図6）

90×60cm、深さ45cmの不整形を呈し、壁下部は長軸方向にだらだらと落ち込む。無文土器8片が出土したが、詳細時期不明である。

⑦ 土坑52（挿図6）

65×50cm、深さ14cmの橢円形を呈する土坑で、南壁下が一段低く掘り込まれている。無文土器1片のほか、黒曜石剝片1点が出土した。

⑧ 土坑53（挿図6）

50×45cm、深さ33cmの不整円形を呈する。無文土器3片が出土したにとどまる。

⑨ 土坑54（挿図9）

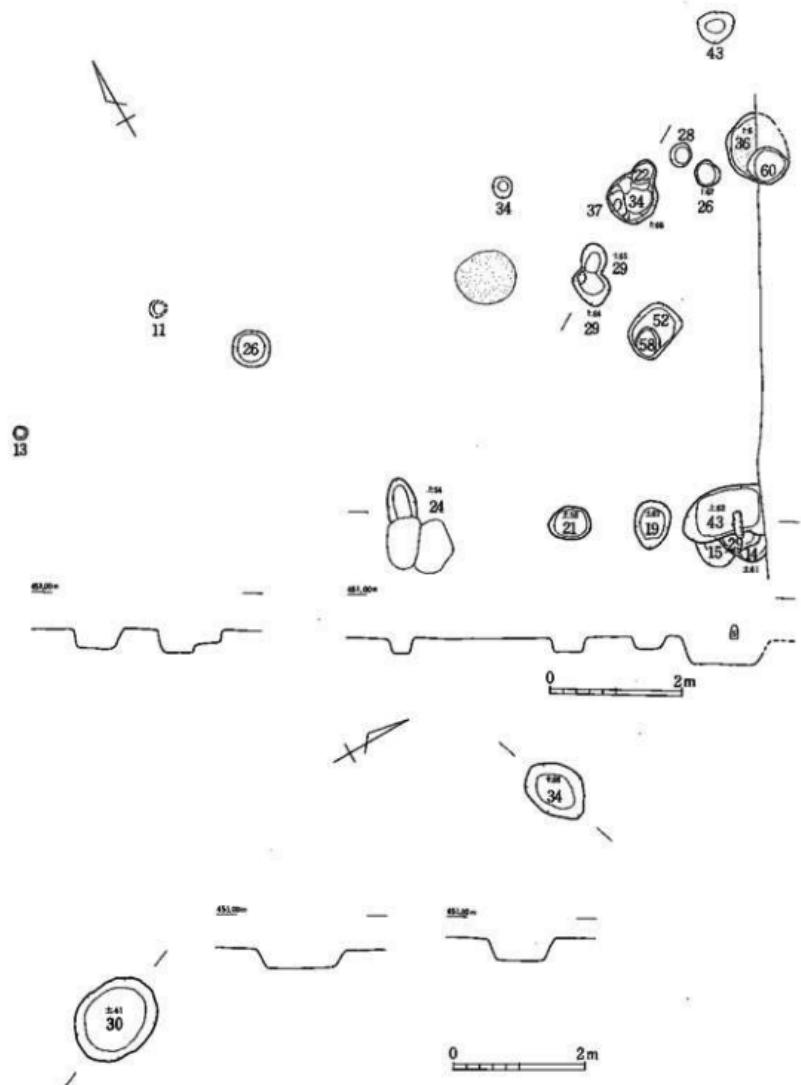
他の穴に切られるため、40cmを測る一辺のみ確認された。深さ24cmでややゆるやかな立ち上がりを示す。無文土器2片が出土した。

⑩ 土坑55（挿図9）

60×50cm、深さ21cmの不整方形を呈する。外面が剥落した底部付近破片ほか、無文土器2片が出土した。

⑪ 土坑56（挿図6）

95×80cm、深さ31cmの不整形を呈する。壁はややゆるやかな立ち上がりを示し、とくに北壁はだらだらと落ちている。出土遺物は内外面赤褐色を呈する無文土器1個体のほか、無文土器10枚片黒曜石剝片1片があるが、詳細時期は不明である。



押図9 土坑・柱穴平面図(4)

⑦ 土坑57（挿図6）

65×50cm、深さ30cmの不整形を呈する。本址より鉢形土器1、無文土器片9が出土した。鉢形土器は口唇に突起を有し、丁寧なミガキが内外面に施されている。出土遺物から縄文時代晚期前葉に比定される。

⑧ 土坑58（挿図6）

Aトレンチに切られて全体の約半分を調査したにとどまる。確認された一辺は70cm、深さ22cmを測る。無文土器3片が出土した。

⑨ 土坑59（挿図6）

105×60cm、深さ20cmの不整形を呈する土坑で、中央南寄りに径30cm程の小穴がさらに17cmの深さで掘り込まれている。土坑60を切る。無文土器6片のほか、火熱を受けた敲打痕ある石器1点が出土した。

⑩ 土坑60（挿図6）

105×45cm、深さ25cmの不整形を呈しており、東壁寄りに僅かに低い部分がある。器面の著しく荒れた無文土器1固体および黒曜石小剣片1が出土したが、詳細時期は不明である。

⑪ 土坑61（挿図9）

土坑62およびAトレンチに切られて全体形は不明である。底部は一段低く掘り込まれている。無文土器3片、黒曜石、チャート小剣片各1が出土した。

⑫ 土坑62（挿図9）

Aトレンチに切られて長軸の規模は不明であるが、短軸70cm、深さ43cmを測る。土坑61を切る。底部片1を含む無文土器10数片が出土したが、詳細時期は不明である。

⑬ 土坑63（挿図9）

70×55cm、深さ19cmの不整楕円形を呈する土坑で、壁はややゆるやかに立ち上がる。無文土器3片が出土した。

⑭ 土坑64（挿図9、第2図6）

60×45cm、深さ29cmの不整楕円形を呈する。ややゆるやかに壁が立ち上がり、北壁下が僅かに窪む。第2図6は鉢形土器の口縁部破片で、口唇部にB突起をもつ。口縁部文様帶は羊齒状文が退化して沈線間に刻みが施されており、以下縄文が施文される。朱彩土器である。ほかに無文

土器7片、硬砂岩剝片1点が出土した。出土遺物から、本址の年代は縄文時代晚期前葉大洞BC式併行期に比定される。

#### ⑥ 土坑65（挿図9）

土坑64に切られ長辺は不明であるが、確認された一辺は35cm、深さ29cmを測る。磨消繩文施文の小破片1点および無文土器1片が出土したが、縄文時代後期に位置づくほかは詳細時期不明である。

#### ⑦ 土坑66（挿図9）

55×50cm、深さ34cmの不整円形を呈する土坑で、下部はだらだらと落ち、西壁下で僅かに産む。本址からは台付鉢、鉢、深鉢が出土した。台付鉢は台部片で三叉状入組文が施文され、透かし穴が開けられている。鉢形土器は薄手無文で口唇に刻みが施される。深鉢は粗製無文の土器である。出土遺物から本址の時期は縄文時代晚期前葉大洞B式併行期に比定される。

#### ⑧ 土坑67（挿図9、第2図7）

40×35cm、深さ26cmの椭円形を呈する。無文土器2片が出土した。

⑨ 土坑68（挿図9、第2図7）  
105×75cm、深さ34cmの不整椭円形を呈する土坑で、壁はゆるやかな立ち上がりを示す。第2図7は口縁直下に最大径をもつ鉢型土器で、口縁部に棒状工具によりやや幅広な沈線が施文される。石英等含んだ焼成良好な厚手の土器である。ほかに無文土器1片が出土した。出土遺物から縄文時代後葉に比定される。

### 3. 柱 穴 群

調査地区的南西部分、土坑群と重複して多数の柱穴が検出された。形態、規模等ばらばらであるが、遺物の出土した土坑と別段差異はない。土坑群と同様廃棄に伴なう遺構である可能性が高いが、詳細は不明である。

## 4. 遺構外出土遺物

### (1) 縄文時代

#### ① 土 器（第3図～第10図15）

本遺跡出土土器は縄文時代中期から晩期後葉の長期にわたっている一方、有文土器の占める割合は著しく低い。

##### a類 中期

1は押引き沈線により文様が描かれる地文が縄文の土器である。2は棒状工具による幅広の沈線で区画文が描かれ縄文が充填される。やや薄手の焼成良好の土器である。3は中期後葉の唐草文系の土器で沈線で描かれた区画文の内部に円棒の先端で刺突文が施される。

##### b類 後期前葉

4～6は丁寧なミガキの施される焼成良好な土器で磨消縄文手法が用いられる。4は口縁がやや外反する。5はやや内湾し平坦な口唇である。7は鉢形土器の胴部上半で、5と同様磨消縄文の無文部に刺突文が充填される。8～10はやや幅広な沈線で文様が描かれており堀之内式に類似する。

##### c類 後期中葉～後葉

11・12は褐色を呈する焼成良好な鉢形土器で、平行沈線で描かれた文様間に縄文が充填されるとともに内外面に丁寧なミガキが施される。15・17・18は沈線で区画された無文帶を口縁部にもち、器面がやや荒れる。16・19・20は石英等の砂粒を多く含み、器壁が荒れた土器で、口縁部および胴部上半に磨消縄文によるやや幅狭な文様帯が展開する。縄文時代後期中葉の加曾利B式に比定される。22～24は器面の荒れた脆い土器で入組文型のモチーフが展開する。25は外面黒色を呈し、焼成は良好である。26は灰褐色を呈する土器で、良好な焼き上がりを示す。口唇には押圧を、外面には隆帯を貼付し、片そぎ状に刺突が施される。27・28は薄手の深鉢で外面に顯著な調整痕をとどめる。26～28は胎土・色調・焼成等共通しており、後期後葉に位置づけられる。

##### d類 後期終末～晩期前葉

29～32は頸部の隆带上に刺突、刻みが施される。29・30は赤褐色を呈し、内外面に横方向の丁寧なミガキ調整がなされる。口縁部上端が外反し、頸部以下は薄手の器体をもつ。34は三叉状入組文の施文される鉢形土器で、口縁部が内湾する。内外面褐色を呈し、丁寧なミガキの施される

焼成良好な土器である。35～37は粗製の鉢形土器で、器面は著しく荒れている。口縁外縁に2個1対の小突起が認められる。34～37は繩文時代晚期前葉大洞B式併行期に比定される。第4図1は沈線間に刺突が施される鉢形土器で、口唇部にB突起が付される。口縁部文様帶には節の細かいLR繩文が施文され、微かに朱彩の痕跡をとどめる。胴上半に最大径をもつがその下半および内面は粗いミガキが施されたのみで、内外面とも接合度が認められる。2は1より整った文様が施された浅鉢でやはり朱彩される。4・5は外そぎ状の口縁で、外縁に節の細かい繩文が施文されその上部に貼付文や沈線が付される。6は台付鉢の台部で透かし穴をもつ磨消繩文の土器である。晚期前葉大洞BC式併行期に比定される。

#### e類 晩期中葉～後葉

7～9は磨消繩文の施文される浅鉢で、いずれも内面に丁寧なミガキの施される焼成良好な土器である。8は11の胴部文様が口唇部に彫られている。11・12は頸部隆帯に沈線および刺突の施される壺形土器である。11はT字状三叉文を異方向に交互配列しており、佐野遺跡HI類等にその類例をみる。13・14は浅鉢、鉢類の胴部文様で、雲形文の内部を磨消繩文で充填している。15～22は胴部上半の文様帶に沈線による健の手文が施文される。内外面暗褐色の焼成良好な土器で内外面に丁寧なミガキ調整が施される。佐野Ib式の影響を受けた土器で、岐阜県中津川市中村遺跡III-I類Bなどに類例がみられこの地域に分布するものと思われる。繩文時代晚期中葉大洞C式併行期に比定される。23～26は薄手の無文土器で内外面に丁寧なミガキが施される。23は口唇に突起、26は沈線が施される。27～29は台付鉢のくびれ部で、隆帯上に沈線、刻みを施す。30は浅鉢の底部付近で、厚手の内外面に丁寧なミガキが施された土器である。31は口縁外縁に貼付された隆帯の上下を沈線でなぞった粗製の深鉢で、器面は著しく荒れ非常に脆い。32は31と同様幅広な沈線が2条施文されるが、焼成は良好である。33・34は口唇部に押圧が施される。23～34は繩文時代晚期中葉から後葉に位置づけられる。

#### f類 その他の有文土器

第5図1～6は地文繩文の土器である。1・2は同一個体で焼成良好な精製の土器である。胎土、焼成等晚期中葉の土器に類似する。4は内面にみがき調整が認められる焼成良好な土器で、下端は接合部が剥落している。6は厚手な焼成良好な土器で、擦りのきつい繩文が施文される。7～12は沈線文施文の土器である。7は焼成良好な土器で沈線間に刺突が施される。9は地に顯著な条痕を認める。8・10は沈線に繩文が併用される。9は粗製の鉢形土器で、石英等砂粒を多く含み器面が荒れている。13～18は条痕施文の土器で、15が幅広な粗いものの、他は細かい条である。焼成はやや不良で厚手のものが多い。19～30は口唇に刺突、押圧等が施される。19・30は上に開いた器形で、砂粒を多く含み器面が若干荒れる。23・25・26・30は口唇に押圧が施され、なかでも25は棒状工具による押圧が連続的になされている。28は口唇に突起があり、その両側に

刺突が施されている。23・24は外面に幅広な調整痕をとどめる。

#### g類 無文土器

第6図1は口唇部内湾する深鉢で、口縁直下横位以下縦方向の幅広なミガキ調整痕をとどめる。やや薄手の外面に凹凸を残す土器である。胴部下半の2は同様に縦方向の調整痕と外面の凹凸をとどめる。3は横方向のミガキ痕を顯著に残す。4は胴部上半内面に稜を持つ薄手焼成良好の土器で、外面に細かい調整痕をもつ。6・7は無文の鉢形土器で丁寧なミガキが施される。8~18は石英等砂粒を多く含み、器面が荒れた深鉢である。8・14はやや凹凸を残し、12・18は調整痕が認められる。16・17の口縁外縁には粘土がはみ出す。第7図1の5は表面にほとんど砂粒が認められないやや軟質の土器である。1は接合痕を外面にとどめる。6・7・10・12・17は口縁外縁に粘土のはみ出しないし脹みをもつ。7・8・12・18は若干の凹凸を外面に残す。9・19は内面に稜をもち、特に9は口縁内縁に脹みをもつ。無文土器は縄文時代後期から晩期に比定されるが、詳細は不明である。

#### h類 底部

第8図1は内外面に接合痕がみられ、外面縦方向のミガキ調整が施されるものの器面は凹凸を残す。底部に不明瞭な網代痕をとどめる。2は胴部上半が著しく広い土器で浅鉢と思われる。砂粒も多く含む器面のやや荒れた土器で底部に微妙に網代痕が認められる。3は底部脇に張り出しを持ち、底部に2条1組の2本超え2本潜り1本送りの網代痕を残す。4は他の土器と器形を異にし、底径が著しく小さい。石英等砂粒を多く含む内面に凹凸のある土器である。5は底部脇に明瞭な張り出しをもち、底部の網代痕は縦り編みである。8は2本超え1本潜り右1本送りの網代痕であるが、中央部で経材の編み順がくずれている。同様に、第8図9、第9図2・6は右1本送り、第8図10・11、第9図3~5は左1本送りを示す。第8図11は外面に接合痕を残す底径の小さい土器である。第9図1は第3図3と同様経縫2条1組の2本超え2本潜り1本送りの縦編みである。胴部下半が膨らむ器形で外面に接合痕をとどめる。5は胴部下半が他よりやや開き、底部脇の張り出しが顯著である。9は2本超え2本潜り1本送りであるが底部中央で編みを中断している。10・11は木葉痕をとどめる。12は底径が小さく胴部下半は外反ぎみに立ち上がる。13はやや開く器形で、外面に横方向のミガキ調整痕と接合痕が認められる。14は丸底を呈する土器で外面はケズリによる凹凸を残す。胎土、焼成等から縄文時代に属すると考えられる。第10図1・4・6・11は2本超え1本潜り右1本送り、7・9・10は同左1本送りの小破片である。3は縫材が2条1組の2本超え1本潜り右1本送り、5は1本超え1本潜り1本送りの網代痕である。12~15は木葉痕をとどめる。

## ② 石 器（第12図～第21図 4）

本遺跡出土の石器には打製石斧・横刃型石器・不定形石器・敲打器・磨製石斧・石製円板・磨石・敲石・石皿等がある。

第12図～第16図 6は打製石斧である。第12～14図はいずれも硬砂岩製である。第12図 1～3、5・8は刃部が磨滅している。とくに 2・5・8 で著しい。2は両側縁に、3は左側縁中央部、5・7は右側縁に漬しが施される。7・9は大きく自然面を残し、8は粗い剝離により整形された肉厚の石器である。6は粗大な石片を多く含んでいる。第13図 1は粗い剝離により整形され、側縁中央に漬し痕が認められる。刃部は磨滅しとくに右側縁寄りに顕著に認められる。3は接合資料で、自然面を多く残した肉厚の石器である。2・4は刃部が磨滅し、とくに 2 は著しい。漬しは両側縁（3・4）、基部から側縁にかけて（5・8）、右側縁（2・7・9）と施される部位は多様である。9は自然面を多く残し青灰色を呈する。

第14図 1～3 は刃部を折損する。4・5・9・12は刃部に磨滅痕がみられ、とくに 4 は著しい。8は刃部にステップが集中し、刃部先端に比し自然面際の磨滅が顕著である。11は基部が欠損したと思われるが、表裏面からの剥離により基部調整がなされる。両側縁に軽い漬しと刃部に僅かながら磨滅が認められる。12は幅広な刃部をもつ。第15図 1 は両極打法により生産された片片を素材とする。右側縁基部寄りに軽い漬し、刃部に磨滅が認められる。漬しは両側縁（4～6、8、9、12、15）、左側縁（3・11）、右側縁（16）に、刃部の磨滅は 6・11・14 にそれぞれ認められる。3 は刃部再生が施された肉厚の石器である。8 は刃部を僅かに欠損する。13 は表面及び側縁が磨滅する。いずれも小型の打製石斧で、大部分は硬砂岩製であるが、10・13・14 は緑色岩製である。第16図 1～3 は短冊状の打製石斧で、緑色岩製の 4 を除き残りは硬砂岩製である。2・3・5・6 に磨滅が認められ、3 はとくに著しい。第16図 7～第18図 2 は横刃型石器で、いずれも硬砂岩製である。9 は火を受けており背部が赤変している。11 は刃部が外溝する。12 は粗い剝離により整形され、13 は同様に刃部が作出される。第16図 14、第17図 1 は刃部にロー状光沢が僅かに認められる。第17図 1、2 は大型の横刃型石器で、2 は刃部が外溝する。

3 は自然面を大きく残し、両側縁および刃部に細かい調整剝離が施される。5 は外縁の磨滅が著しく、自然面に擦痕を認める。6 は刃部を著しく欠損する石器で、打製石斧の可能性がある。8 は刃部がやや磨滅した薄身の石器である。9 は約半分を欠損し器種の判断は困難であったが、横刃型石器の可能性もある。自然面側を打面に連続した剝離を施し整形した後、刃部作出の調整が施される。10 は自然面を大きく残しており、背部に敲打痕をとどめ粗い刃部が作出される。第18図 3 は粗い剝離により整形されるが、刃部を折損する。5 も同様刃部を折損、左側縁に漬しが施される。第17図 5 が緑色岩製であるほかはいずれも硬砂岩素材である。

第18図 7 は敲打器で先端が著しく潰れている。9 は裏面から連続的に剝離が加えられ整形された石製円板で、表面に擦痕を認める。軟質な石材であるが、石質は不明である。11 は外面に擦痕および僅かに敲打痕をとどめる。断面三角形を呈し、火を受けて平板状に割れている。13 は磨石

の破片で、火を受け赤変している。表面に擦痕、外縁に敲打痕を残す。敲石の石質は花崗岩（1・3・5）、硬砂岩（2）、砂岩（4）とまちまちで、5はとくに表面の荒れが著しい。7・8は石皿で、7が砂岩製、8が花崗岩製である。

石鎚は、五角形を呈するもの（第20図1～4）等形態や大きさがバラエティーに富む。石質はチャート製が多く（1・2・4～7・10）、黒曜石（9・11・13）、玻璃質安山岩（3・8・12）もある。14は拇指状の石器で黒曜石製、15はチャート製の石錐である。16～21は不定形の石器で、18は石匙の可能性もある。16・18・21は黒曜石製、17・20はチャート製、19は玻璃質安山岩製である。第21図1～4は石核である。1・2は黒曜石製、4はチャート製である。3は接合資料で石質は玻璃質安山岩である。

### ③ 土製品（第10図16～22）

本遺跡出土の土製品は縄文時代後期から晩期に位置づくが、いずれも詳細時期は不明である。16～18は滑車状耳栓で、16は表面中央に鉗状の突起が貼付される。その外縁には沈線間に刺突が充填され、中心は両面から深く刺突がなされる。19・20は環状耳栓の小破片で、19は側面に斜方向の沈線文が施文される。21は不明土製品、22は土製円盤である。

### （2）弥生時代（第10図23）

23は壺形土器の頸部破片で、弥生時代中期寺所式に比定される。

### （3）古墳時代（第10図24、第11図1・2、第21図5）

第11図1は、やや厚手の橙褐色を呈する壺で胴部に稜をもつ。2は須恵模倣の蓋壺であり、内面に接合痕をとどめる。いずれも古墳時代後期に比定される。

(4) 中・近世(第11図3~9、第21図6~11)

① 陶器・磁器

中世に比定されるものとして以下の遺物が出土した。仏花瓶(第11図7)、常滑甕、壺等の陶器片、青磁碗片8点、白磁碗片2点、山茶碗系の坏5点、滑石製の石鍋(8)である。

近世の遺物としては橙明皿(3・4)、皿(5・6)等磁器がある。

他に、火鉢底部片(9)、摺鉢片等時期不詳の遺物が出土した。

② 鉄 製 品

本遺跡からは鉈(第21図6・7)、平釘(9)、茎(11)、錢貨(10)、不明鉄製品(8)が出土した。

## IV まとめ

今次の発掘調査の結果、竪穴住居址2軒と土坑68基および縄文時代後期から晩期の土器群等が検出された。これらについて各時代毎概観することで本報告書のまとめとしたい。

### (1) 縄文時代早期

僅かに1片の押型文土器が検出したのみであるが、脩円文の不規則走行施文や胎土、焼成等から細久保式土器に比定される。天伯A遺跡、松尾明や恒川遺跡群新屋敷地籍など、南条面、別府面といった段位段丘の遺跡からの出土例が増加しつつあるが、高燥な台地上に遺跡が多い該期にあって低位段丘の微高地へも生活の舞台が拡大したことがあとづけられた。

### (2) 縄文時代中期

該期の資料も量的には僅かであるが、鼎地区においても天伯A遺跡で集落址が調査されているし、本遺跡南側に隣接する微高地上に営まれた日向田遺跡においても多数の遺物のほか石組炉が発見されている。代田遺跡でも勝坂式土器の良好な資料が出土していることから、集落が低位段丘に営まれるようになったのは少なくとも中期中葉まで遡ると考えられる。今次調査地点の場合、立地等から集落の周縁部分に位置する可能性とともに、山岸遺跡や天伯B遺跡のように遺物包含層に相当することも考えられる。いずれにせよ、周辺微高地の集落景観がある程度復元されれば今次調査地点の果たした空間的な役割も明らかになっていくことと考える。

### (3) 縄文時代後期～晩期

検出された土坑全てと柱穴群の大半が該期に属し、なおかつ該期の遺物が主体的である。なかでも後期中葉から晩期中葉が中心となるが、本文でも触れたとおり有文土器の占める割合は低く、無文土器の大半の詳細時期は不明である。後期になると長野県内では遺跡数が減少する。それとともに良好な資料の得られている遺跡は数少なく、特に伊那谷では伊那市百駄刈遺跡（後期）、同野口遺跡（晩期）、下伊那郡根羽村日影平遺跡（後期）など数は極端に少ない。こうした中で本遺跡出土土器群は各期の土器群の内容と十分に明らかにし得るとは言い難いが、周辺諸地域の土器群の系統、影響下に本地域の土器群がいかなる消長を遂げるかを解明する緒を与えることは確かである。後期前葉から中葉にかけては堀之内式や加曾利B式の影響を強く受けており、晩期前葉になると、安行式系のほか東北地方の土器群の諸要素が見出せる。さらに晩期中葉では、佐野Ib式の系統下に東海地方と強い類似性をもつ鍵の手文が普遍化し、同時に大洞C式の影響をとどめる土器群が存在する。

本遺跡においては、該期の諸遺跡同様包含層および土坑からの出土をみている。接合関係をも

たない小破片資料が圧倒的に多く、また石器類も総体的には刃部再生を併わない折損、欠損品が多いことから、土器、石器類の廃棄空間として機能していた可能性が高い。石器の素材となる剝片類の出土が少ないこともあるいはこれと関連するかも知れない。一方環状耳栓はともかく滑車状耳栓の完形率が高いこと、土偶が1点も出土していないことは注意される。

#### （4）弥生時代中期

該期に比定される土器は壺形土器の頸部片一片のみであるが、すでにこの時期南側段丘崖下にある湧水線あるいは日向田遺跡との間に広がる黒色土を利用して水田が営まれたと考えられる。中期に遡る資料としては鼎地区では一番古く、いちはやく弥生文化が受容され定着したことを物語っている。

#### （5）古墳時代

古墳時代に比定される遺構は竪穴住居址2軒がある。検出された状況から該期の土器群については断片的に知り得るのみであるが、須恵器模倣の壺坏などは当時の土器生産等解明する上で貴重な資料といえる。

鼎地区の該期の他遺跡は天伯B、山岸遺跡など竪穴住居址が集中しているが、本遺跡の場合微高地の末端に2軒のみ検出されたにとどまる。検出状況等から既に他の住居址が破壊されている可能性も否定できないが、仮りに遺跡間の差異が真に存在するならば、本遺跡の至近に古墳がないことから、集落形態と古墳分布の関係について問題を提起するといえよう。

#### （6）中・近世

量的には少ないながらも、出土遺物の内容から付近に該期の遺構が存在する可能性が高い。鼎切石地区は室町時代末の文書に登場する「山洞之郷東方」に相当するものと思われ、伊賀良庄の一部であったようである。また小笠原氏の拠った松尾城にも近い。本遺跡出土の中世の遺物に青磁、白磁の皿や石鍋が含まれていることは、「山洞之郷東方」はともかく、本遺跡が重要な役割を果たしていたことを示唆する。あるいは土豪の館址に関する遺物かと考えられる。殊に滑石製の石鍋については現在知られている座地が長崎県西彼杵半島一帯や山口県下請川南遺跡等に限られており、当時の流通事情を知る上で興味深い。

今次調査の結果、低位段丘上の微高地における集落展開の変遷がかなり明らかにされた。殊に縄文時代後期から晩期にかけての土器群は、これまで不足していた該期のまとまった資料として、飯田下伊那はおろか中部地方の縄文土器研究を進める上で貴重である。今次調査地点の西側にはさらに遺跡の主要部分が広がっており、その保護には十分な注意が必要である。と同時に本遺跡

に隣接する微高地とその間に発達した黒色土の地域も、低位段丘での人間活動の総体を把握する上で欠くことのできない部分であり重要である。

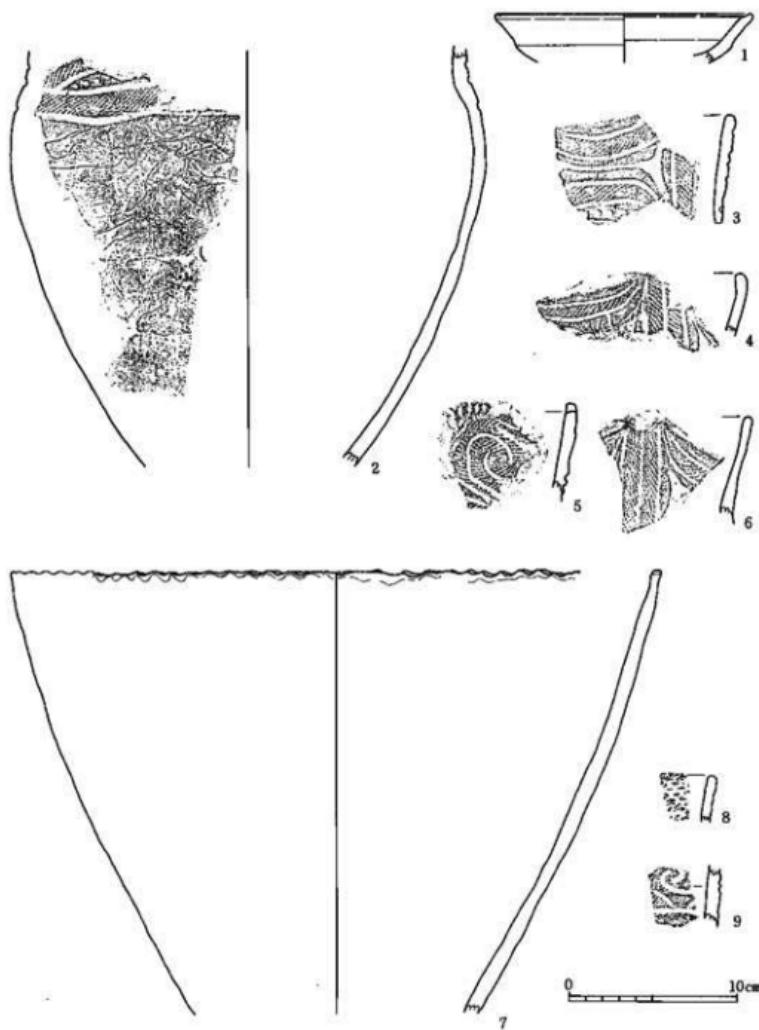
末筆ながら、長野県酒類販売株式会社におかれでは文化財保護法の本旨に厚い御理解をいただき、調査の実施にあたって多大な御協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

### 引用参考文献

- 長野県史刊行会 1981 『考古資料編—遺跡地名表』 長野県教育委員会  
鼎町史編纂委員会 1986 『鼎町史』 飯田市鼎公民館  
伴信夫・塩沢仁治 1969 『長野県下伊那郡鼎町代田遺跡・同松川町庚申遺跡調査概報』  
信濃2-2  
中央道遺跡調査会 1971 『中央道調査報告—飯田地区』 長野県教育委員会  
中央道遺跡調査会 1975 『中央道調査報告—下伊那郡鼎町(その2)』  
長野県教育委員会  
鼎町教育委員会 1975 『下伊那郡鼎町天伯A遺跡』  
飯田市教育委員会 1980 『猿小堀遺跡』  
鼎町教育委員会 1983 『矢高原、八幡原遺跡』  
鼎町教育委員会 1984 『鼎町黒河内遺跡』  
鼎町教育委員会 1984 『鼎町一色、天伯B遺跡』  
飯田市教育委員会 1985 『町道知久町中村線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』  
飯田市教育委員会 1988 『田井座遺跡』  
飯田市教育委員会 1987 『殿原遺跡』  
飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』  
長野県史刊行会 1983 『長野県史考古資料編』  
潮見 浩 1988 『図解技術の考古学』 有斐閣選書  
伊那市教育委員会 1984 『伊那市史歴史編』  
中央道遺跡調査会 1973 『中央道調査報告—伊那市西春近地区』  
長野県教育委員会  
小柳義男・百瀬長秀 1983 『上水内郡牟礼村栄町遺跡採集の縄文時代後晩期資料』  
長野県考古学会誌45  
1981 『縄文土器大成』 第4巻、晚期 講談社  
中津川市教育委員会 1979 『中村遺跡』

- 松本市教育委員会 1972 『長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書』
- 南安曇郡穂高町教育委員会 1972 『離山遺跡』
- 清水市郷土研究会 1960 『清水天王山遺跡』
- 長野県考古学会 1967 『佐野』
- 1981 繩文土器大成』第3巻 後期 講談社
- 下伊那郡根羽村教育委員会 1983 『日影平遺跡』

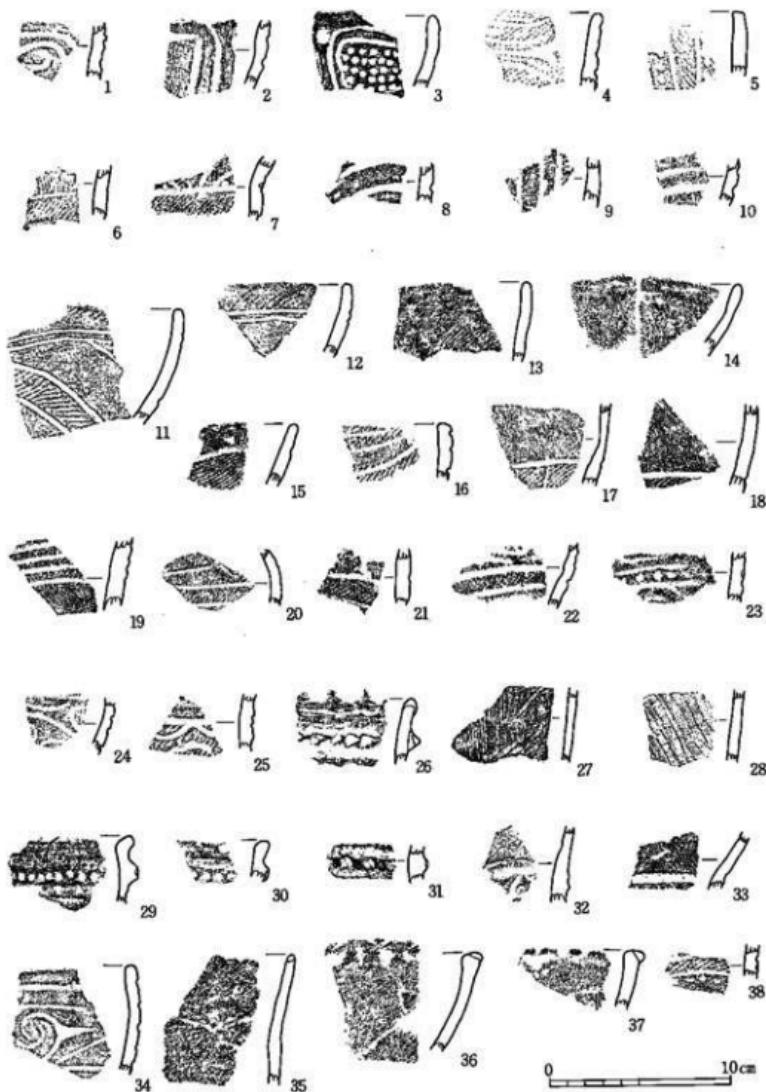
図 版



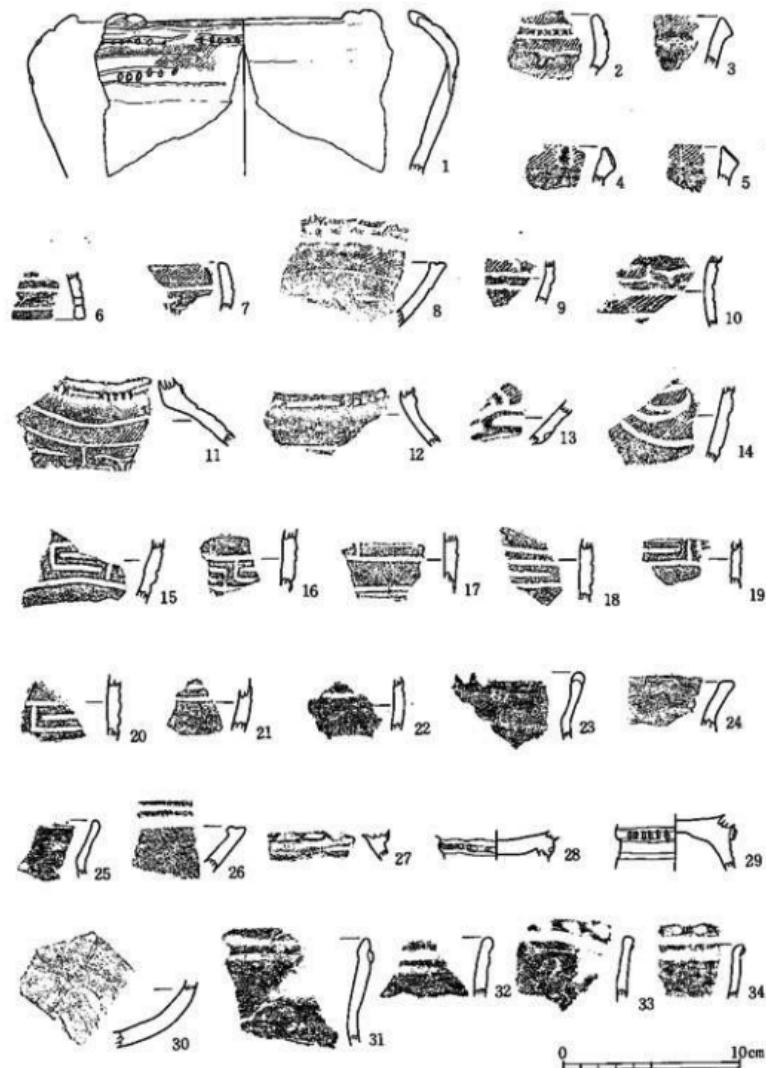
第1図 造構出土遺物(1)(1 土3、2~6 土6、7~9 土7)



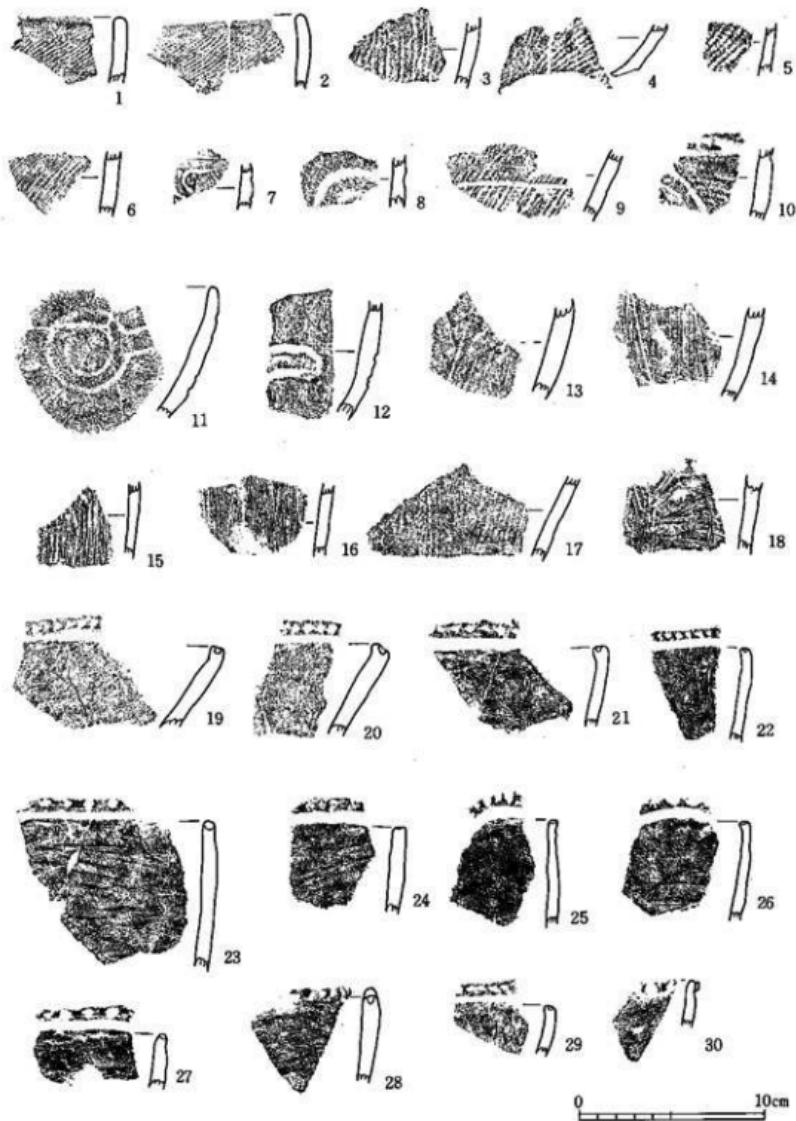
第2図 遺構出土遺物(2)(1 土8、2 土16、3 土18、4 土26、5 土40、6 土84、7 土68)



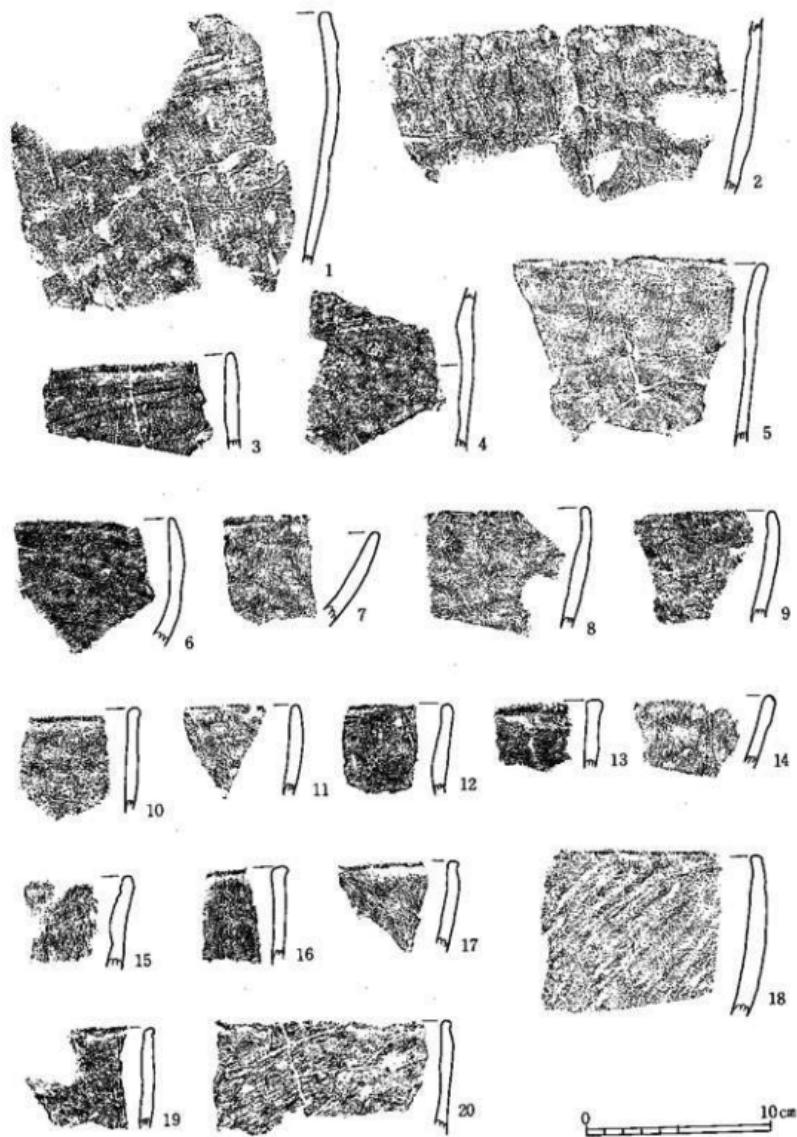
第3図 造構出土土器(1)



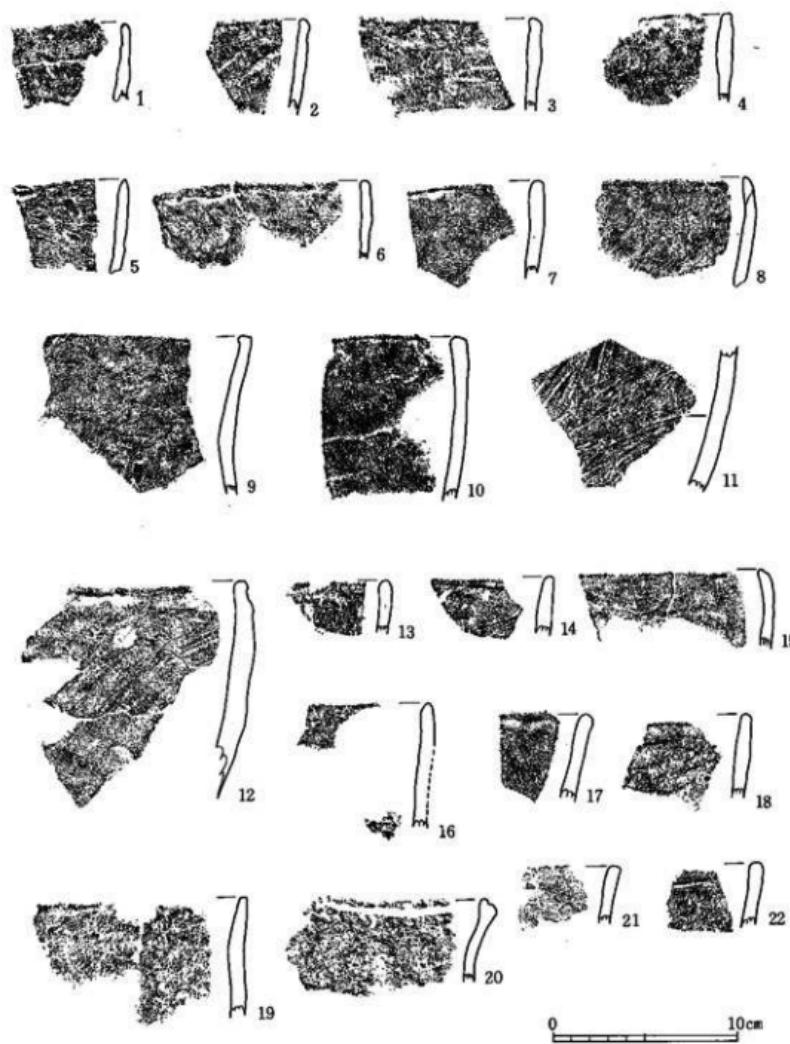
第4図 遺構外出土土器(2)



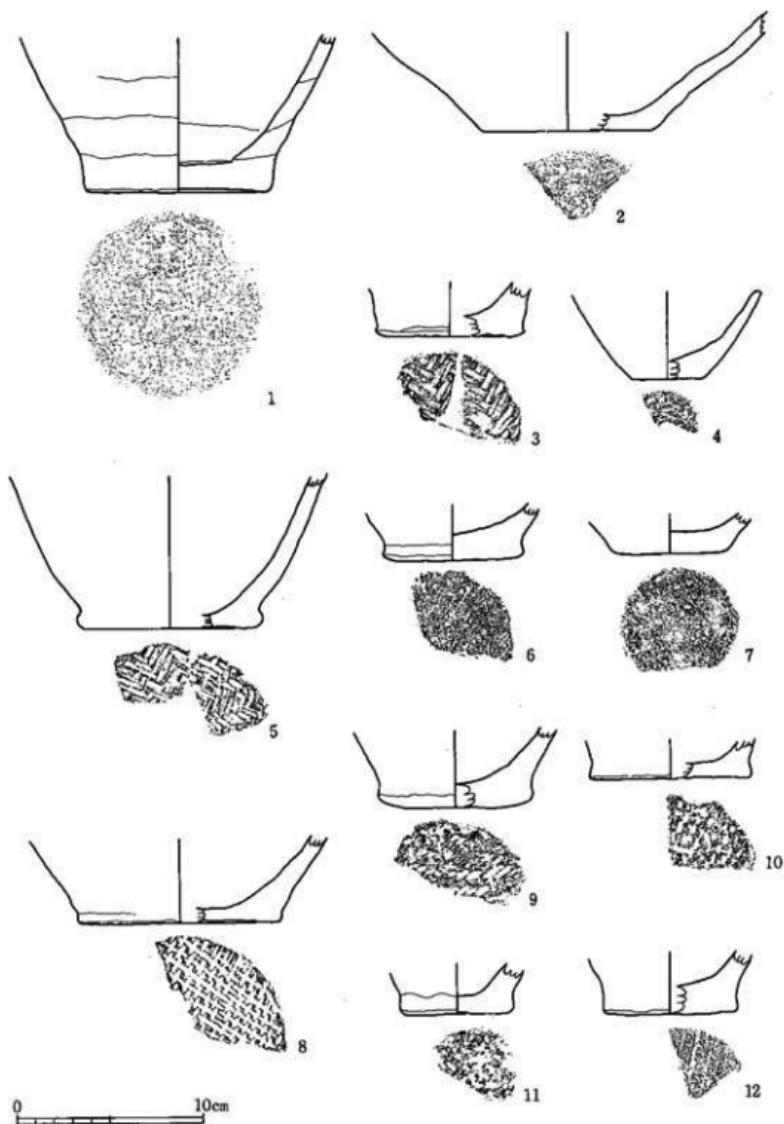
第5図 遺構出土土器(3)



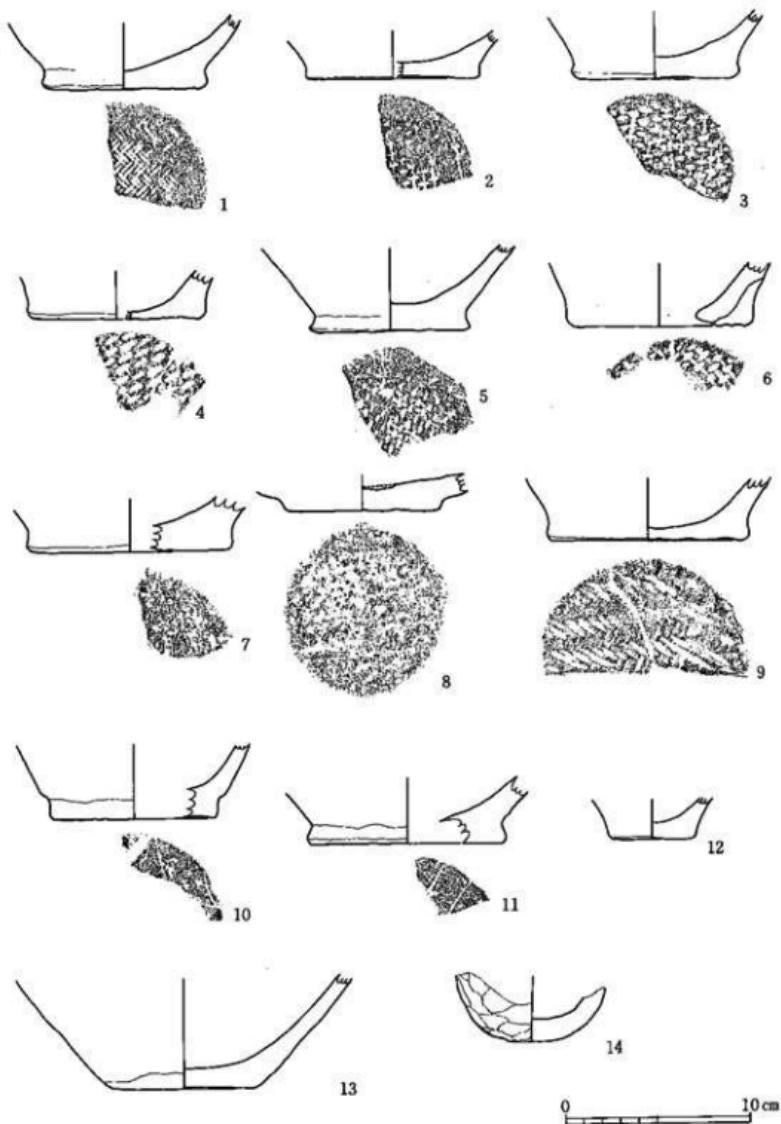
第6図 遺構外出土土器(4)



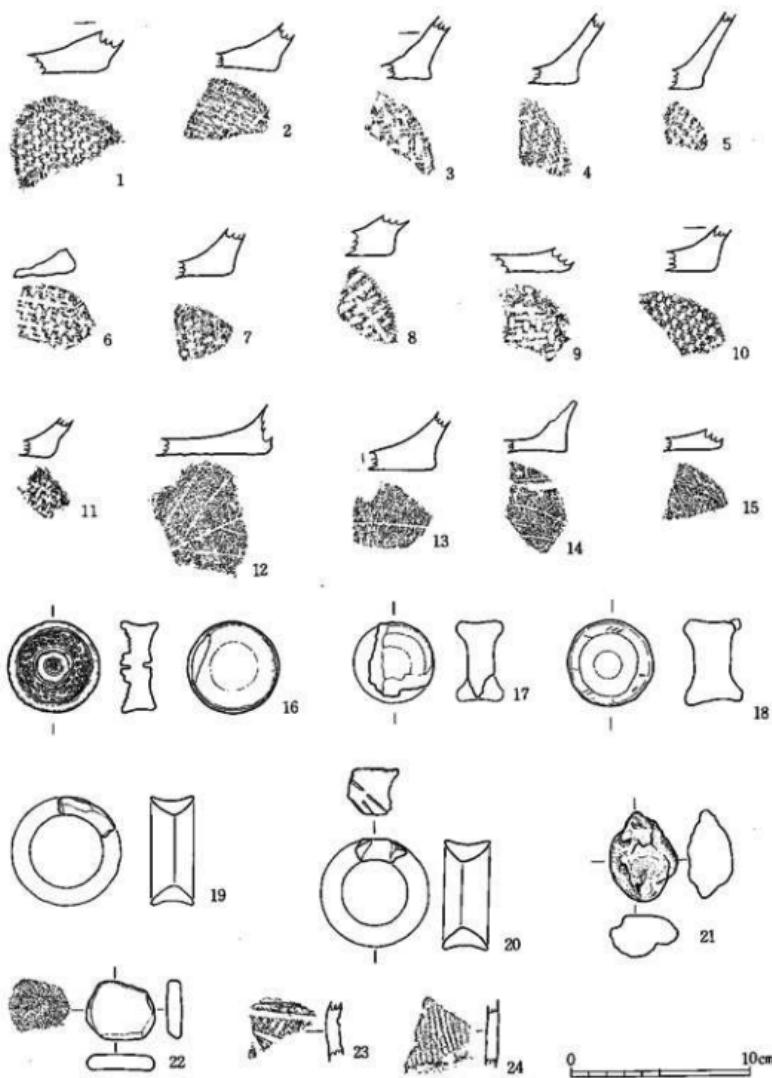
第7図 造構外出土土器 (5)



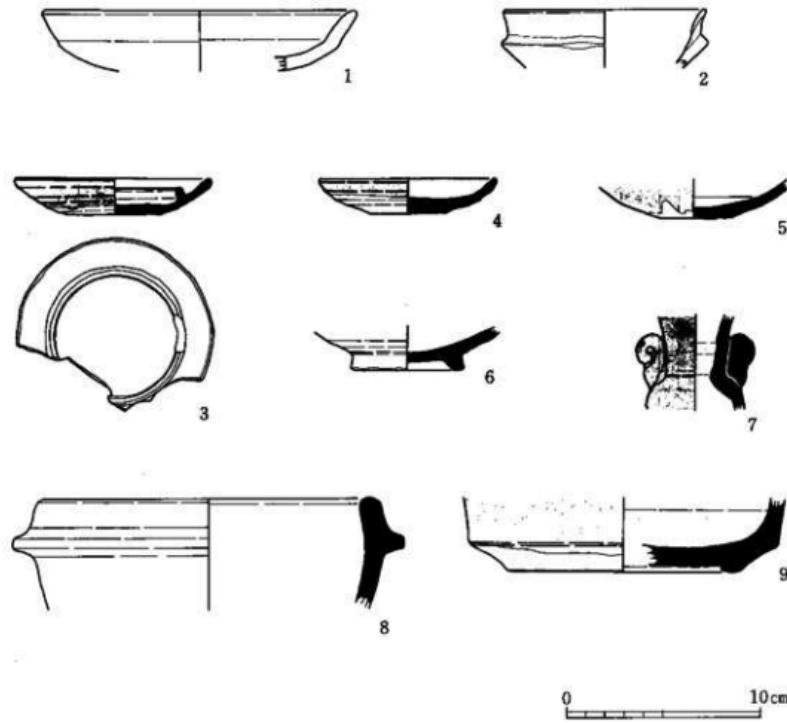
第8図 造構外出土土器 (6)



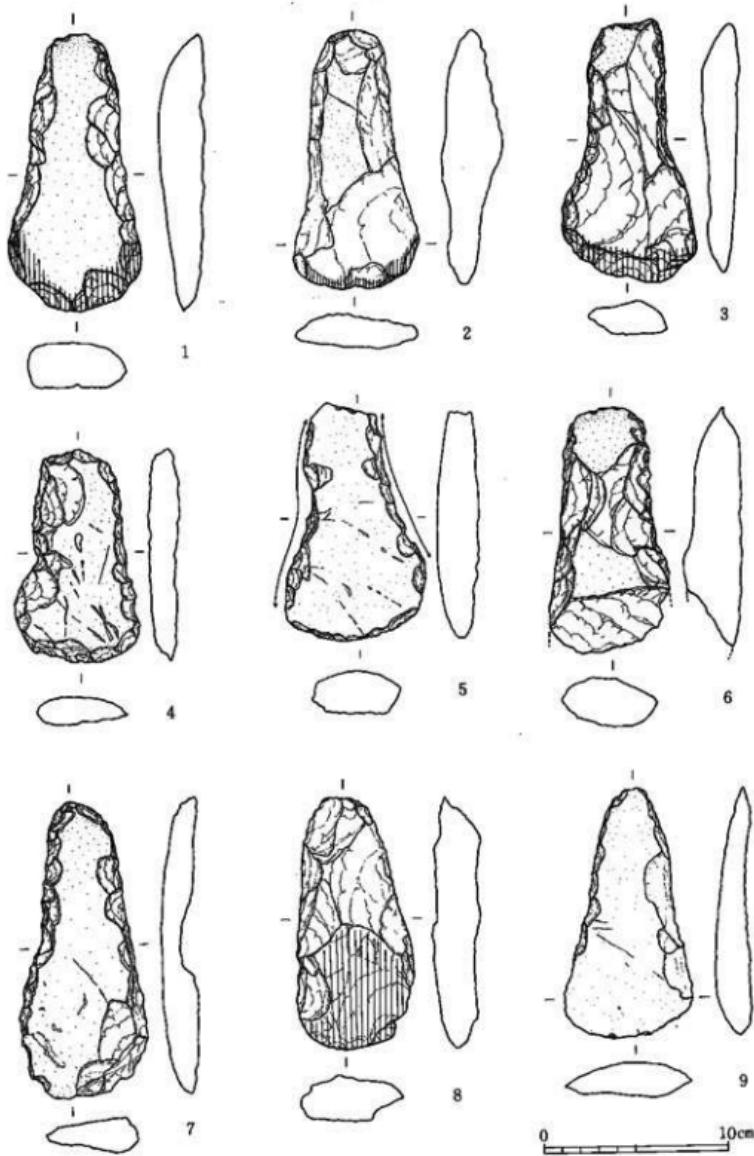
第9図 造構外出土土器(7)



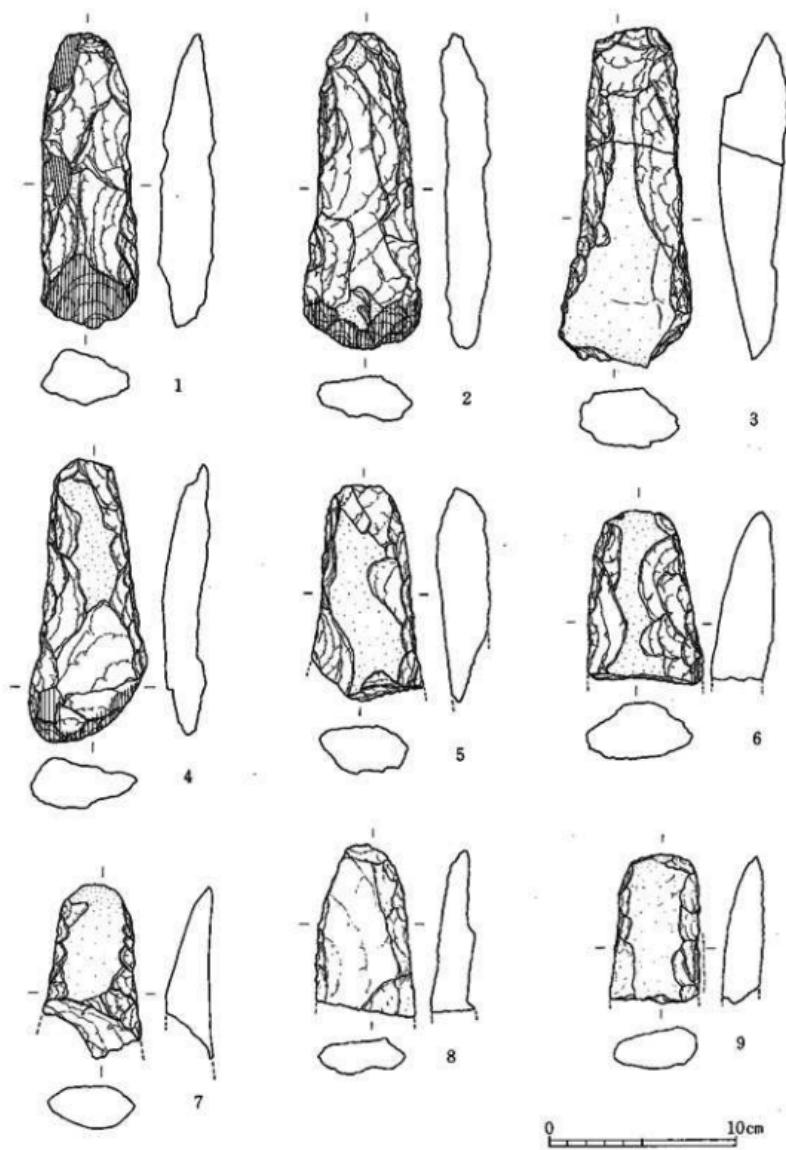
第10図 造構外出土土器・土製品



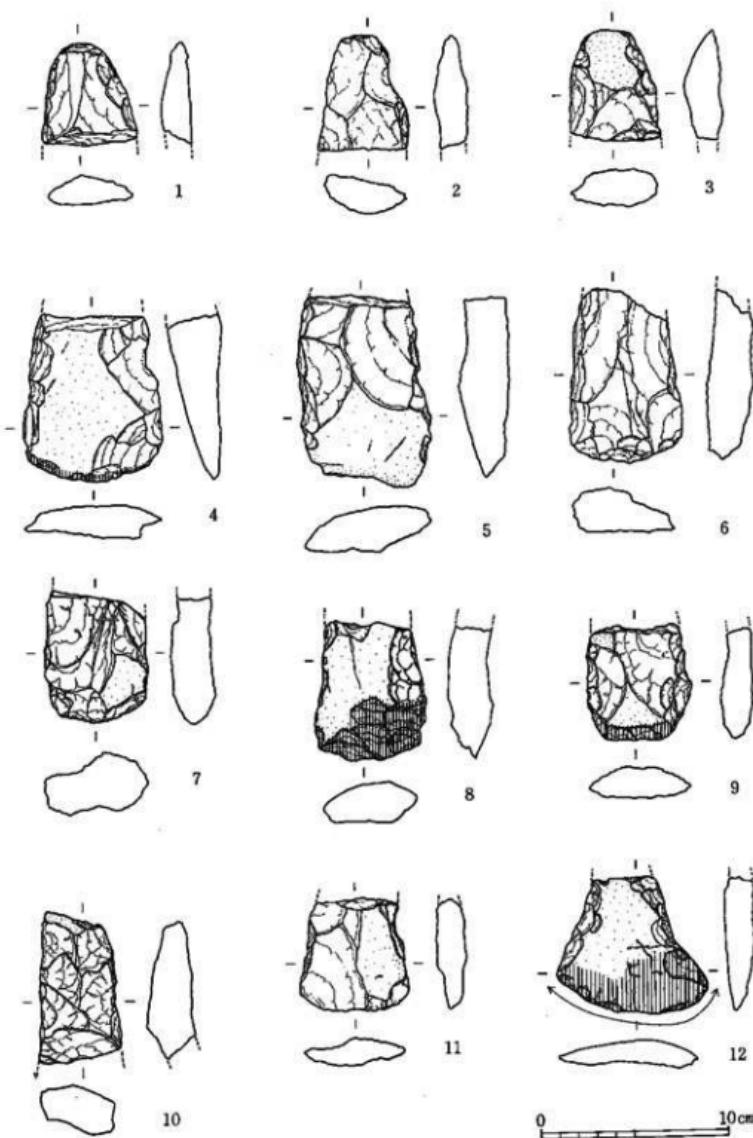
第11図 造様外出土土器



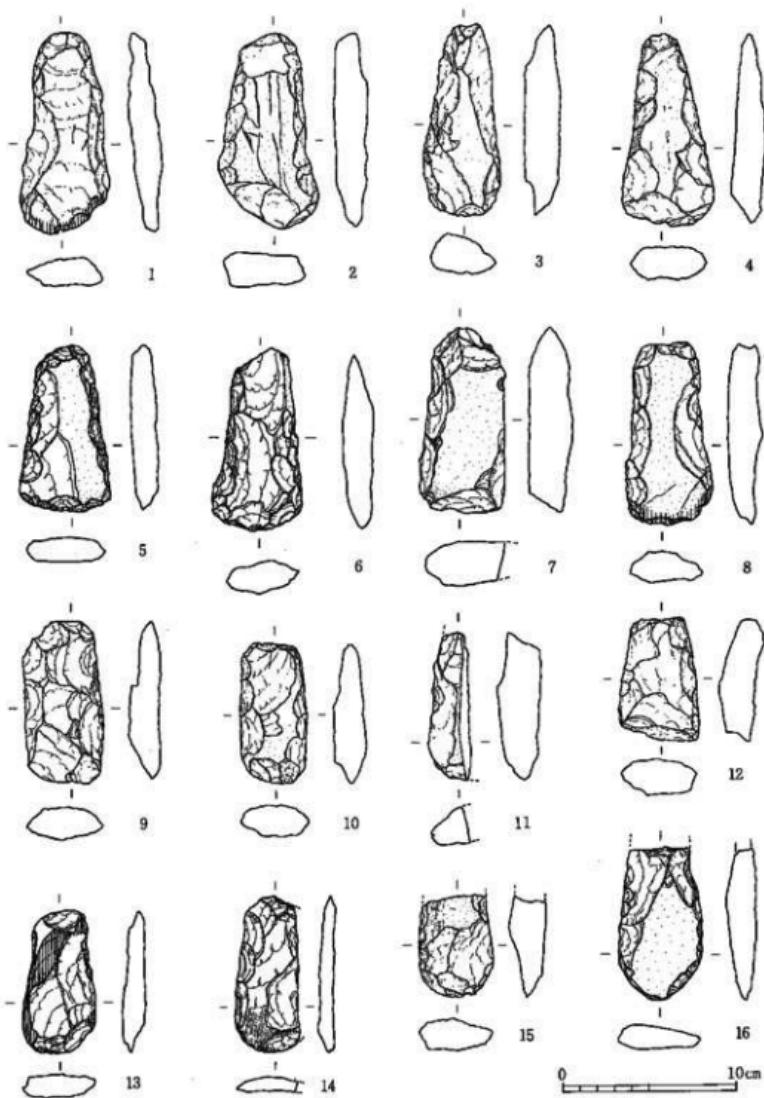
第12図 遺構外出土石器（1）



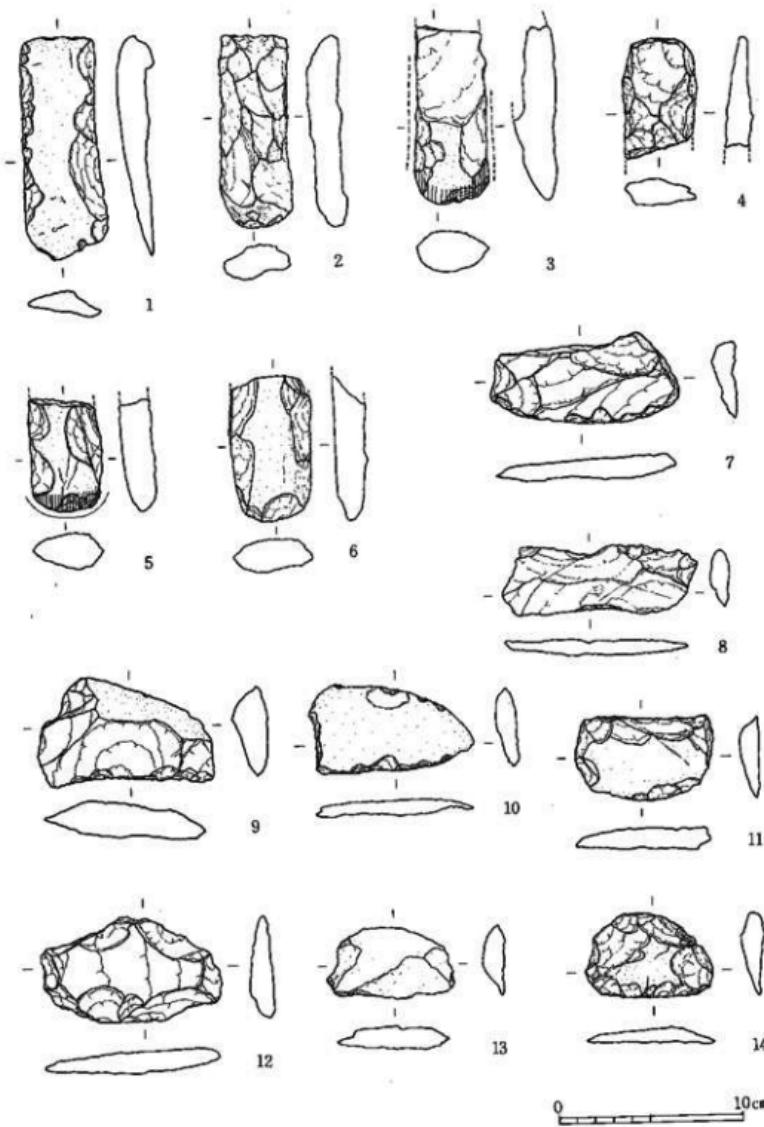
第13図 造構出土石器 (2)



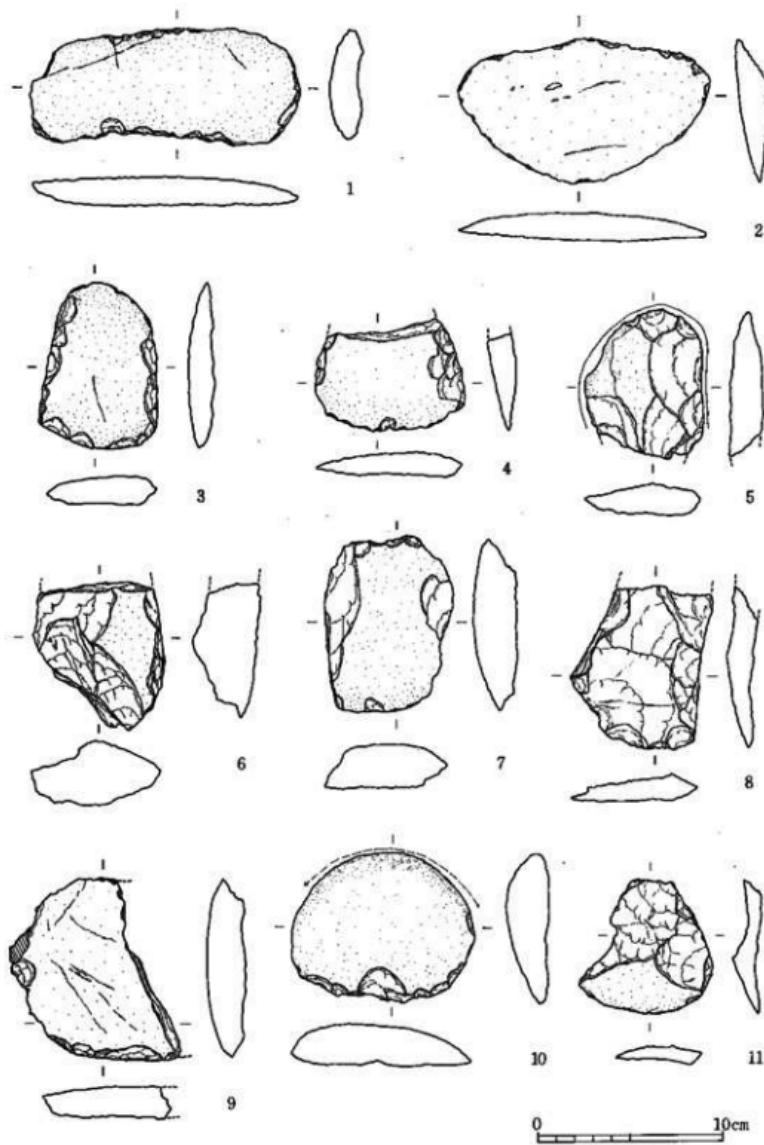
第14図 造橋外出土石器 (3)



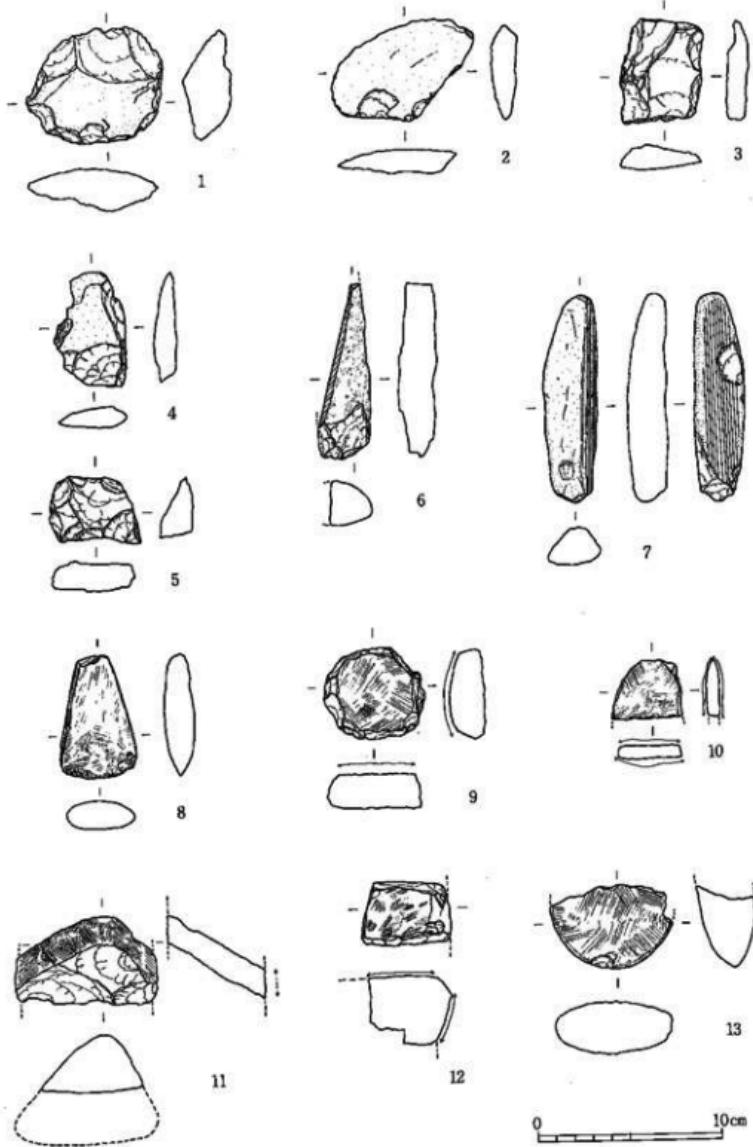
第15図 造構外出土石器 (4)



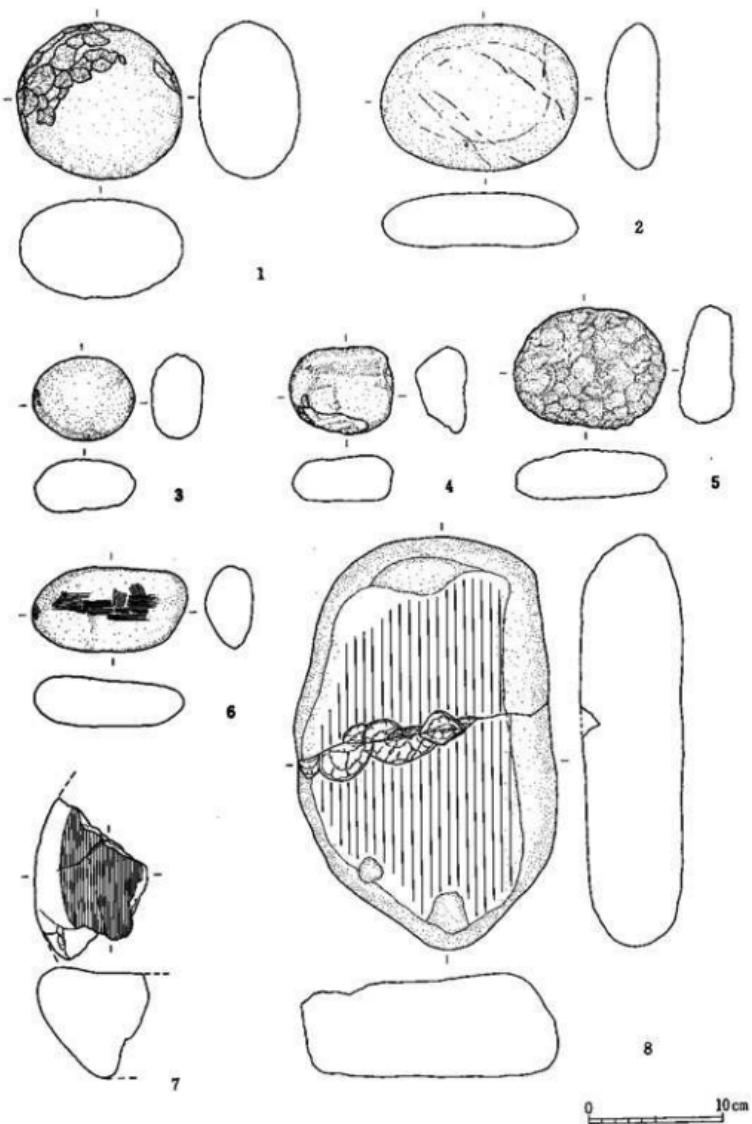
第16図 遺構外出土石器 (5)



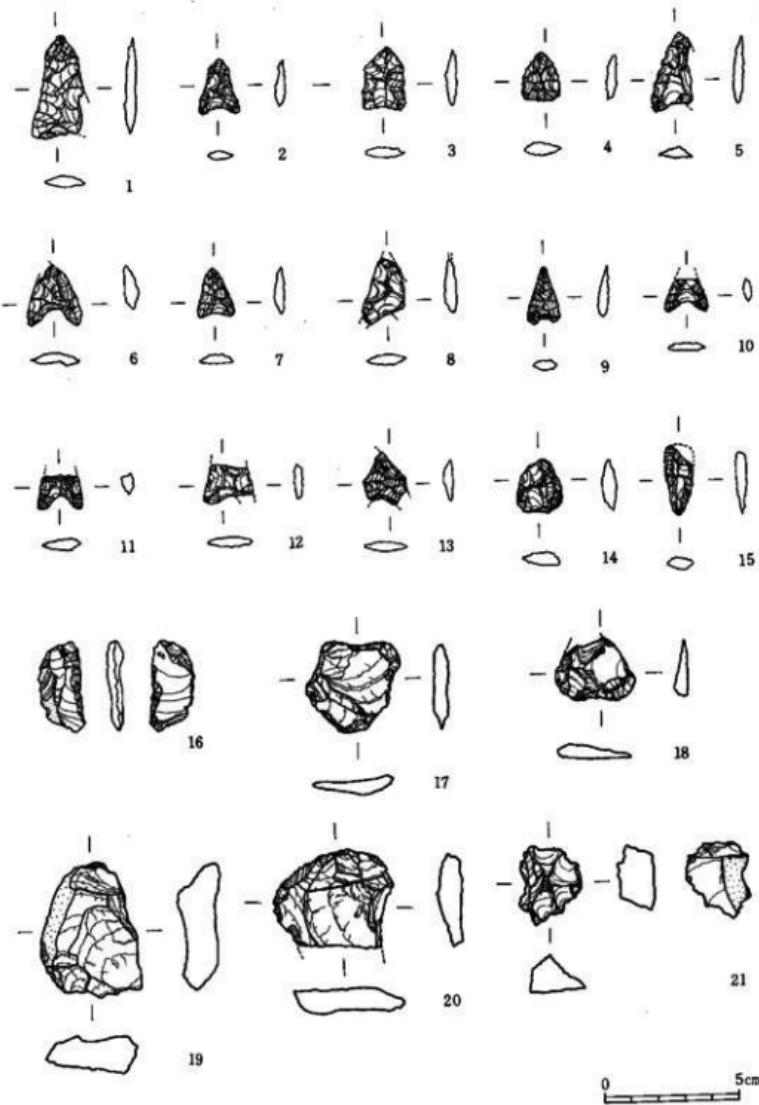
第17図 遺構外出土石器 (6)



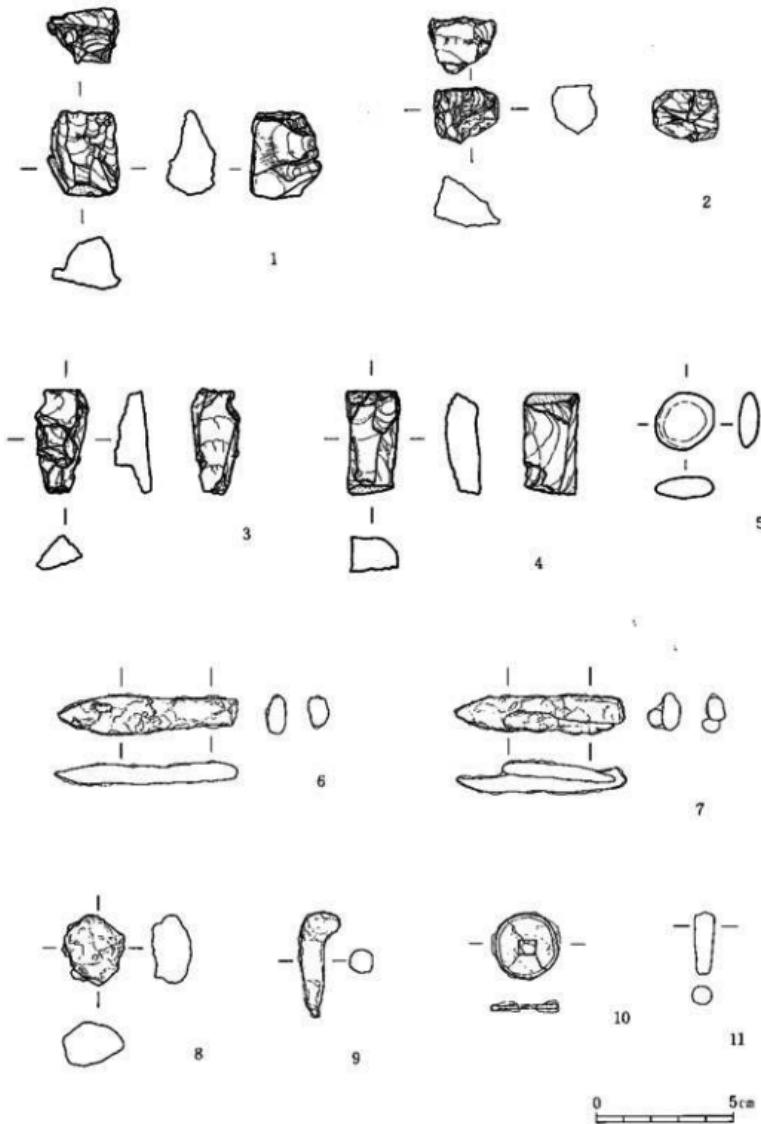
第18図 遺構外出土石器 (7)



第19図 遺構出土石器 (8)



第20図 遺構外出土石器 (9)



第21図 造構外出土石器・鉄製品

# 写 真 図 版

図版 1

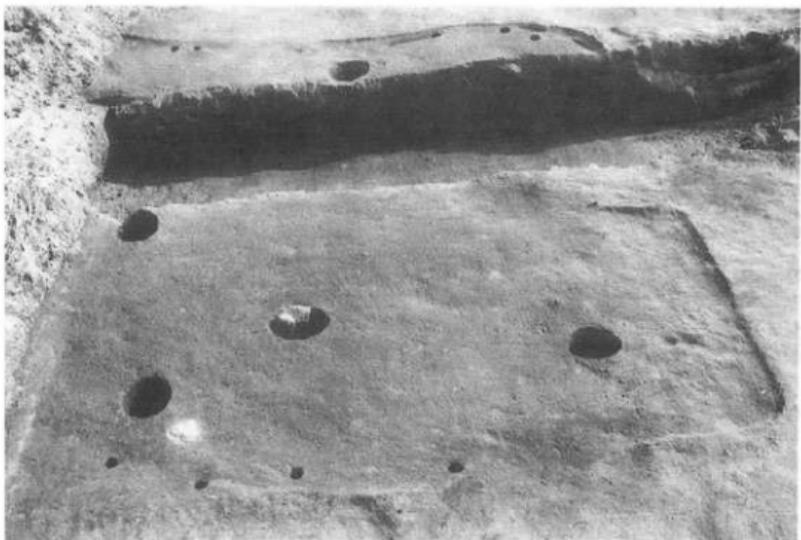


六反畠遺跡全景（南から）

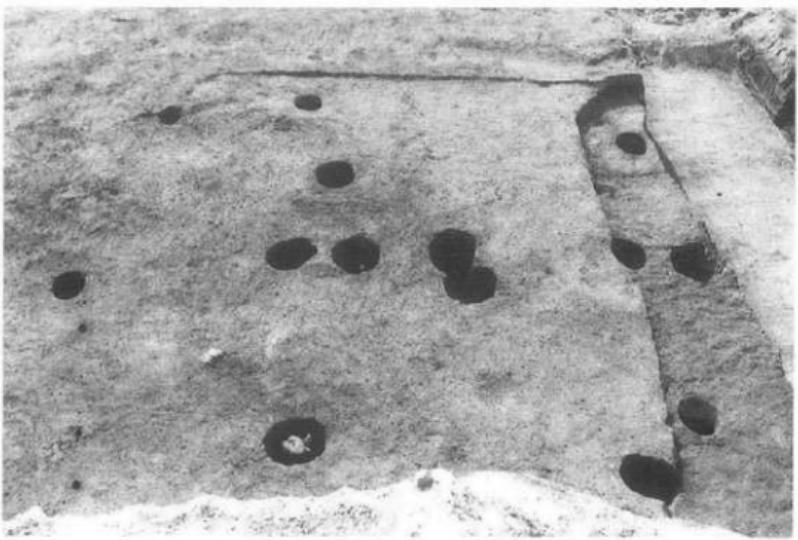


同上（東から）

圖版 2

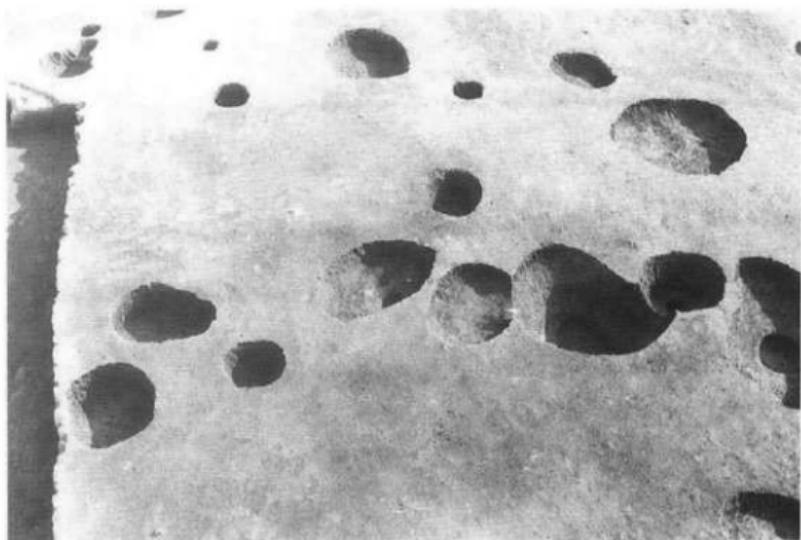


1號住居址



2號住居址

図版 3

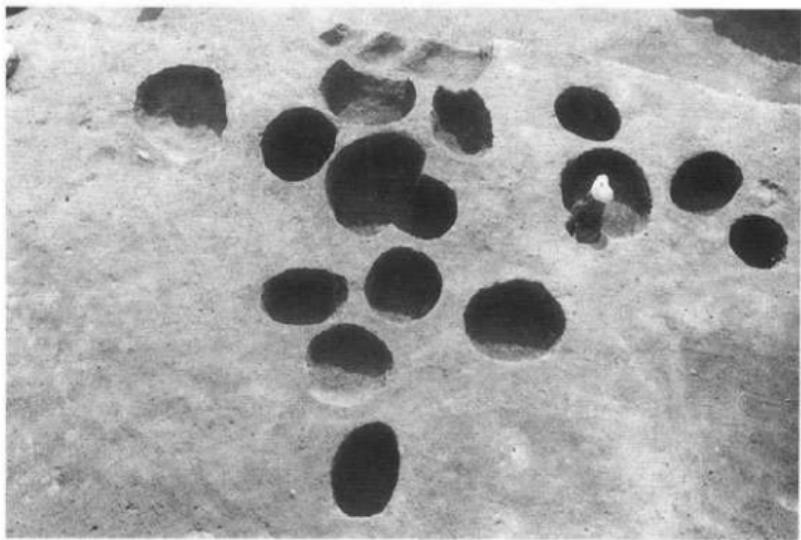


土坑 8~16、柱穴

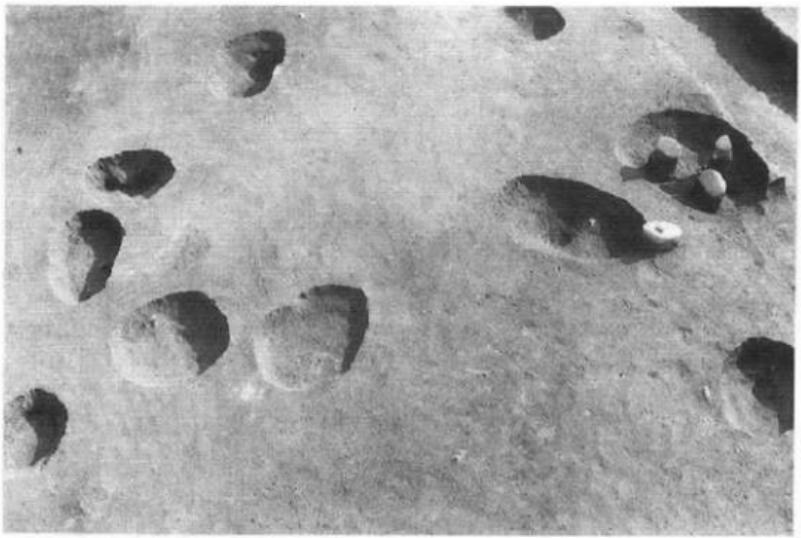


土坑 25、42~57、柱穴

図版 4

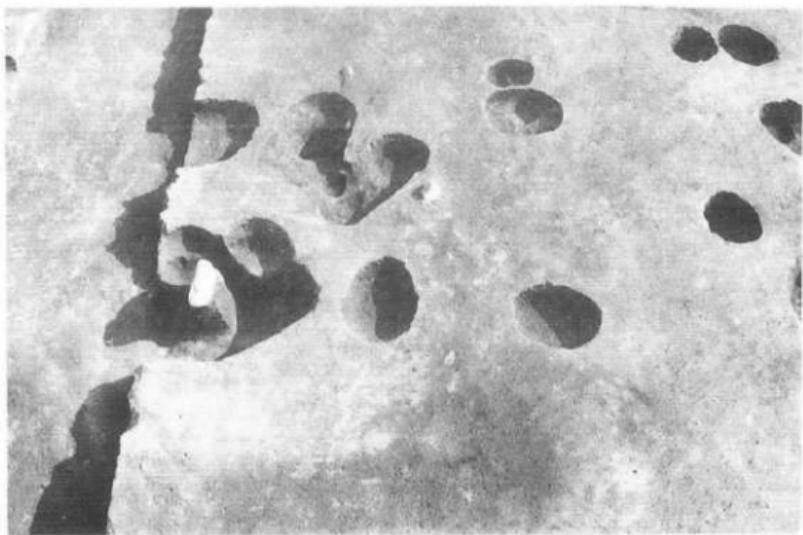


土坑28~39・柱穴

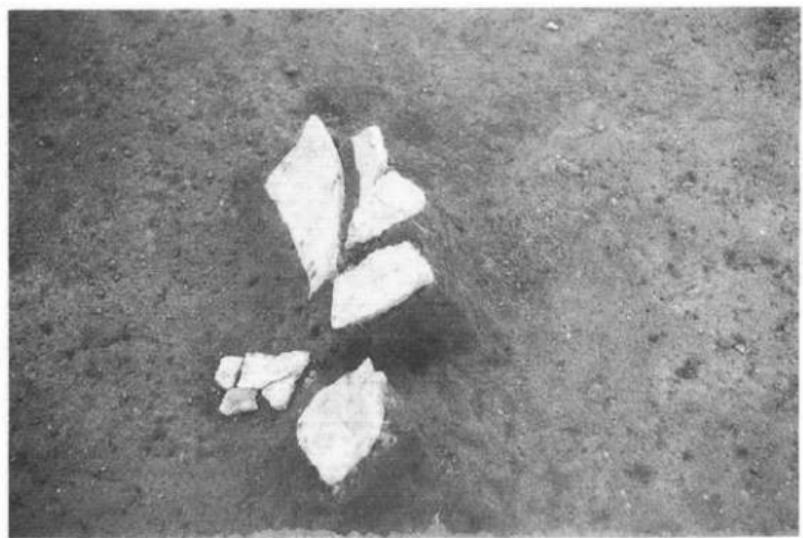


土坑7・18~24・26

図版 5

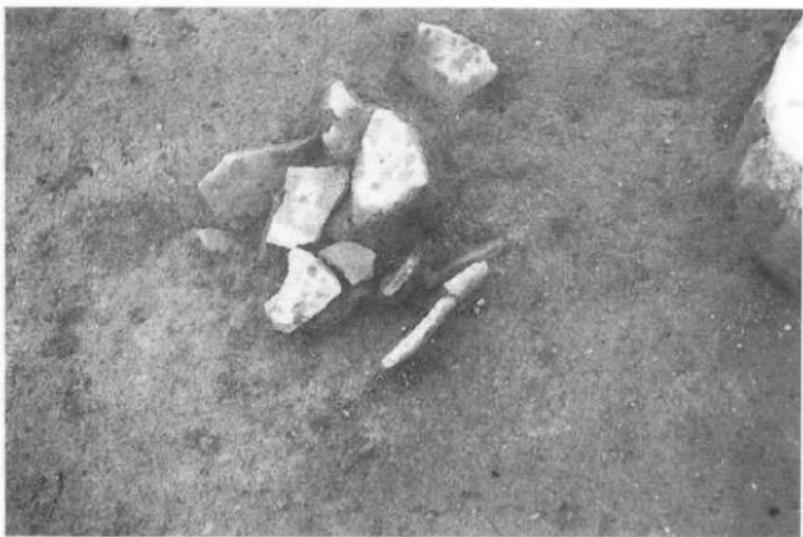


土坑44・52・53・58～63、柱穴



遺物出土状態

図版 6

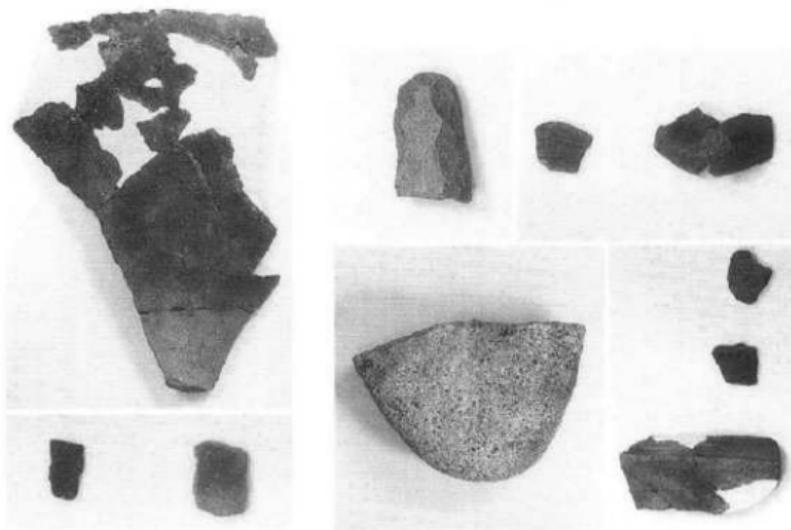
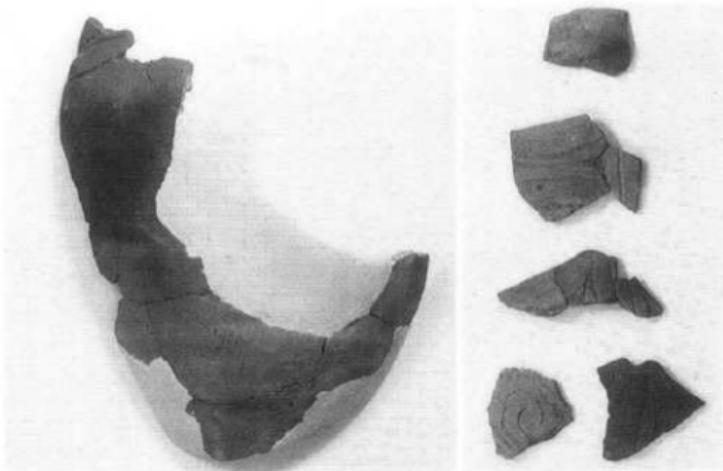


遺物出土状態



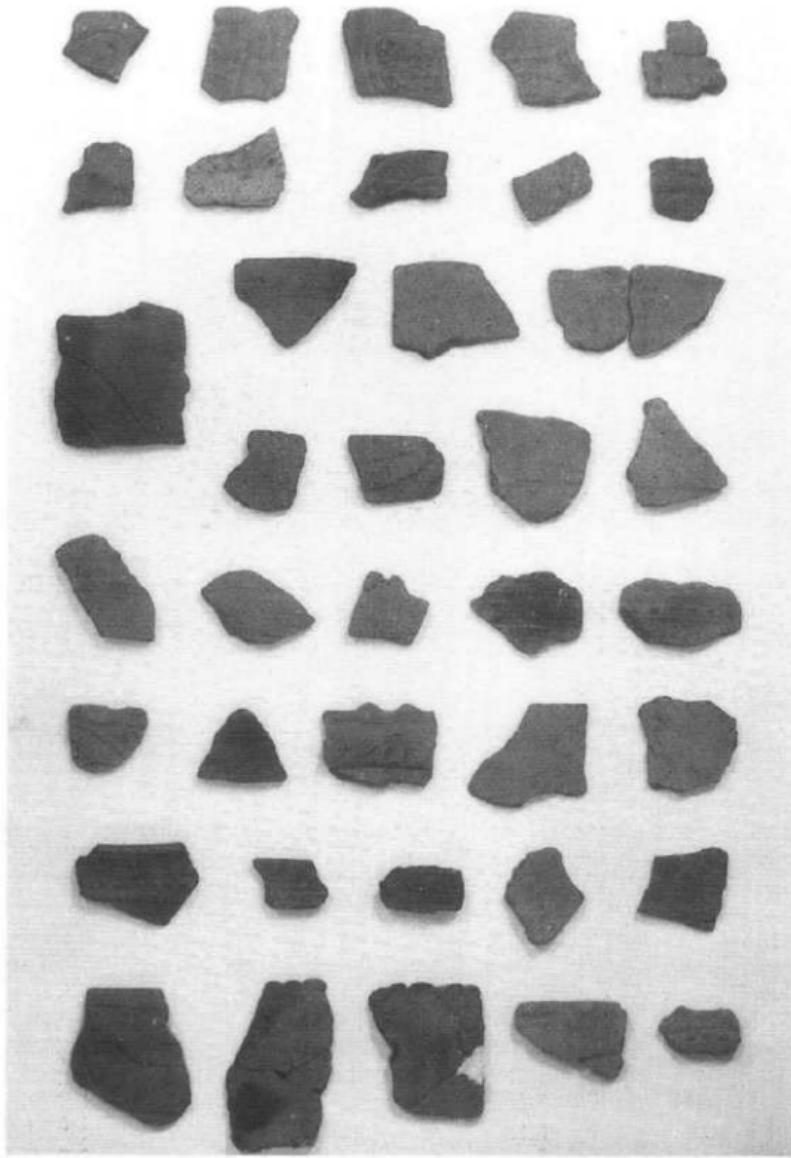
同 上

図版 7



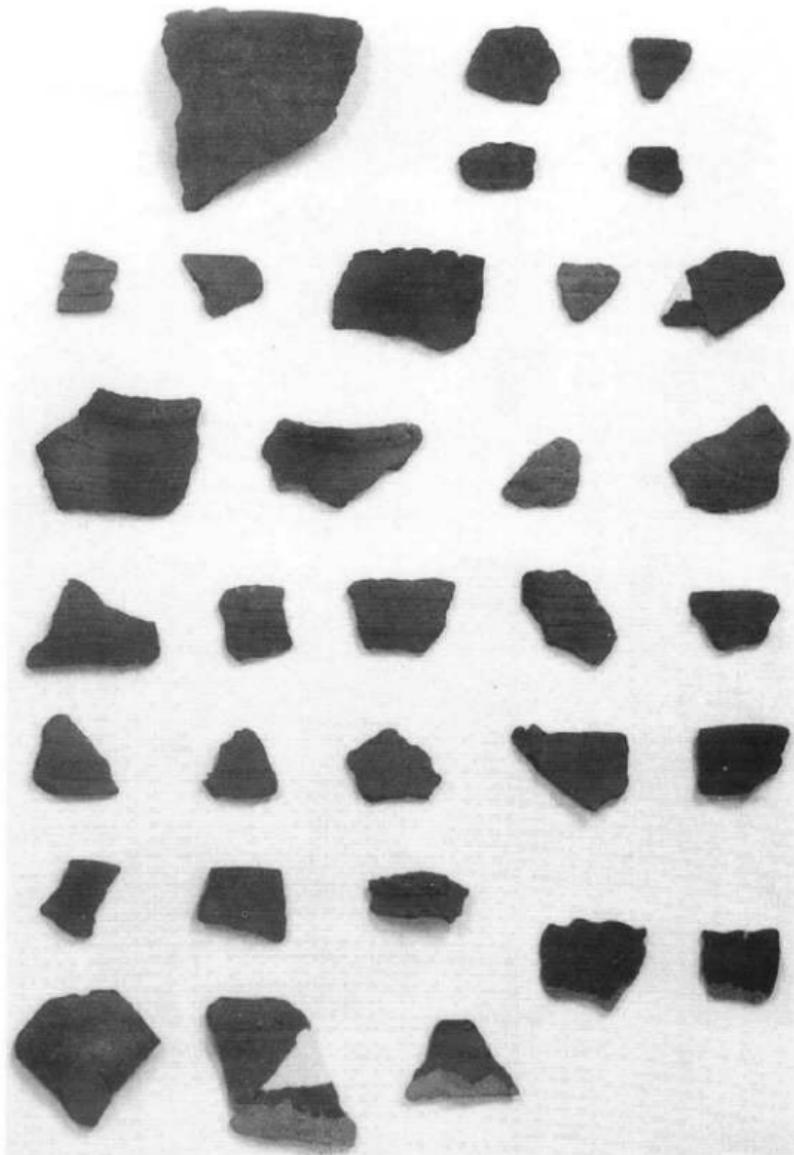
遺構出土遺物

図版 8



遺構外出土土器（1）

図版 9



遺構外出土土器（2）

図版 10



遺構外出土土製品



遺構外出土土器



遺構外出土石器（1）

図版12



造構外出土石器（2）

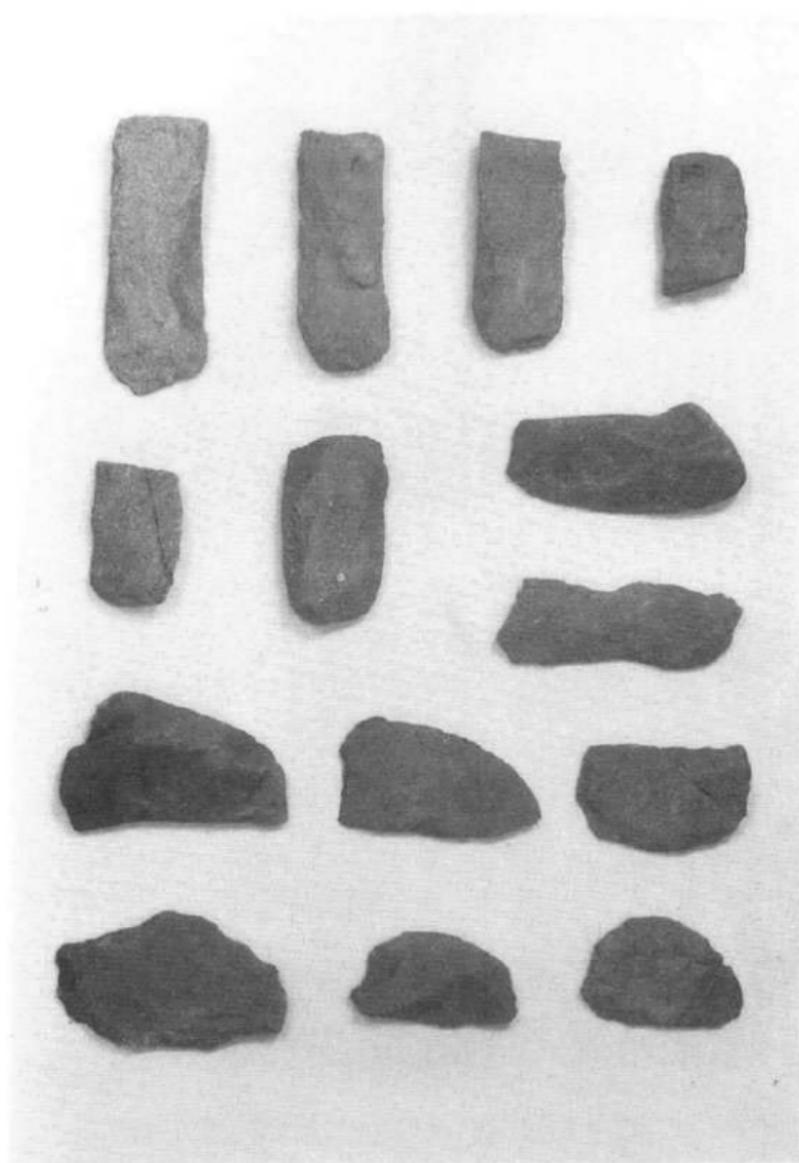


達構外出土石器（3）

図版14

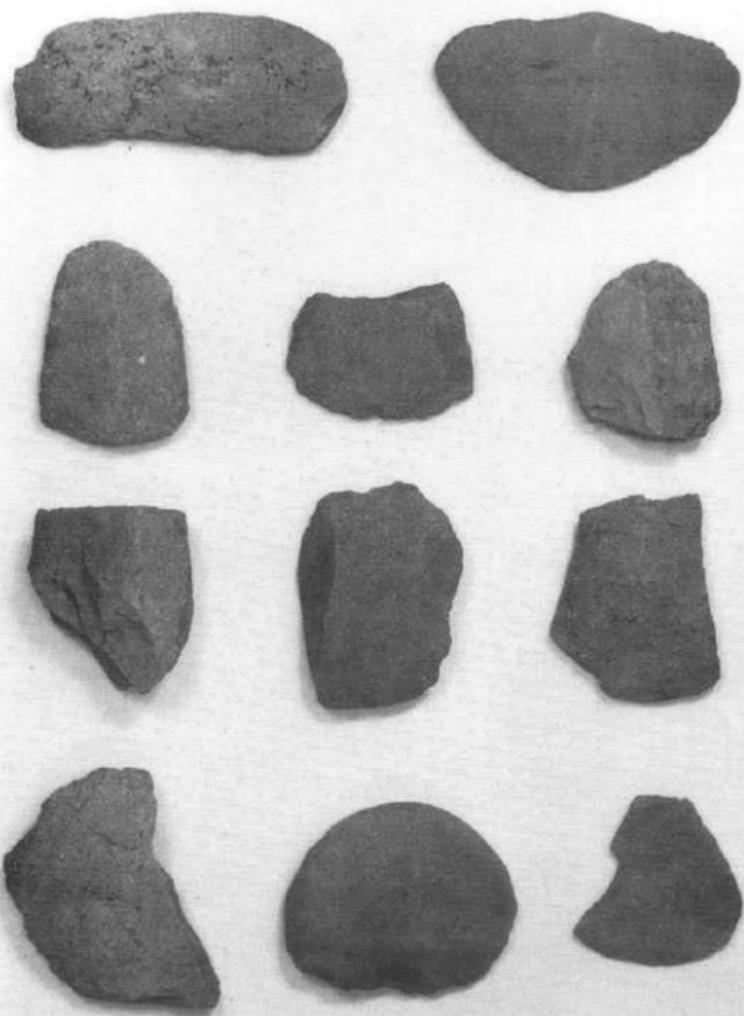


遺構外出土石器（4）



遺構外出土石器（5）

図版 16

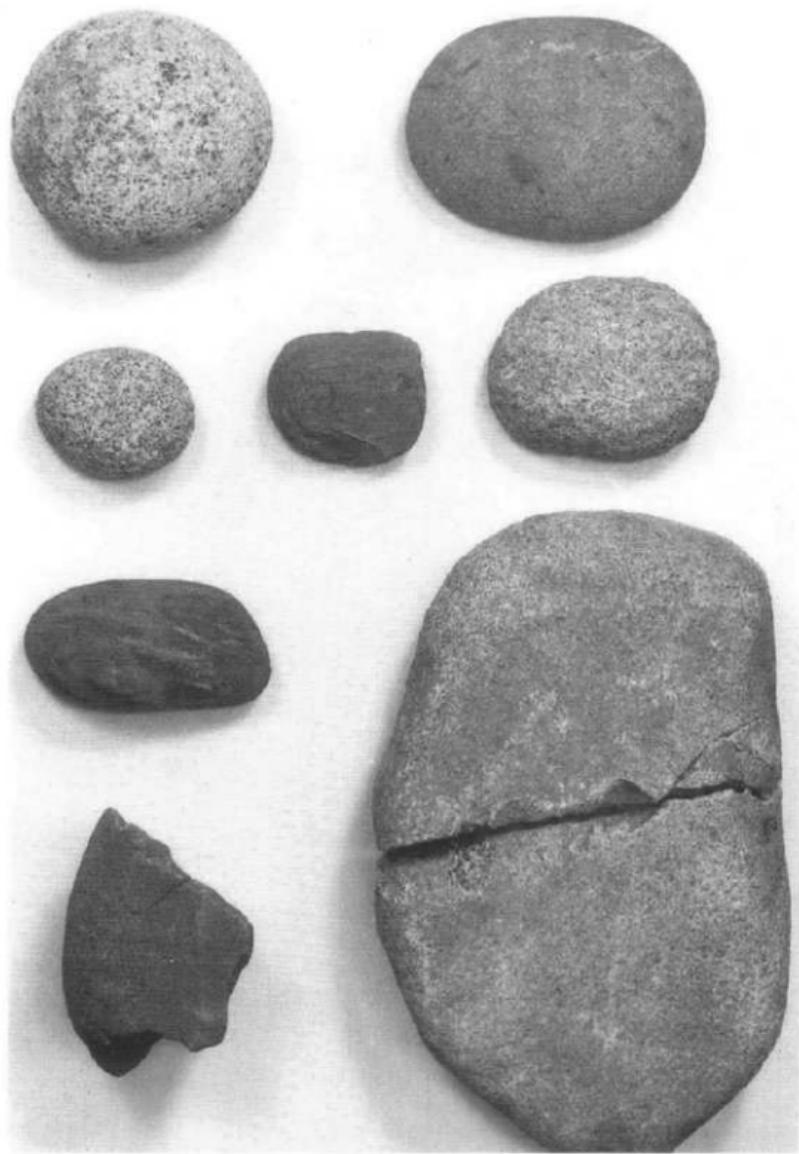


遺構外出土石器（6）



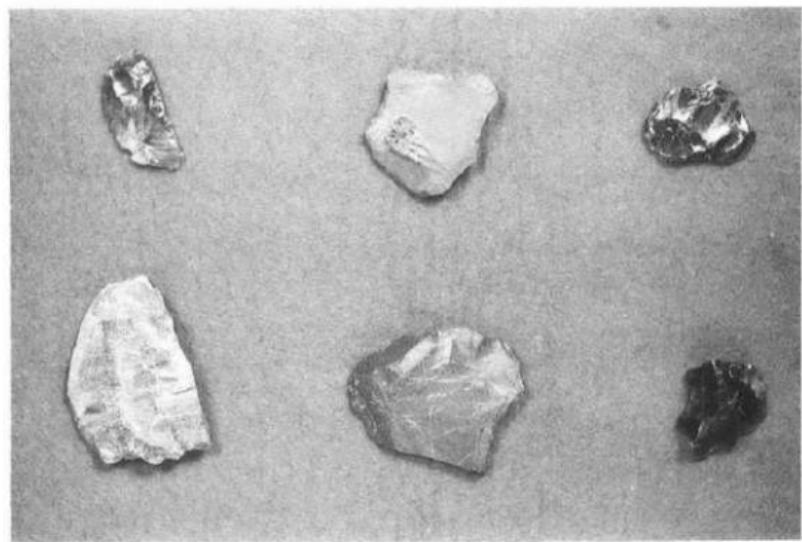
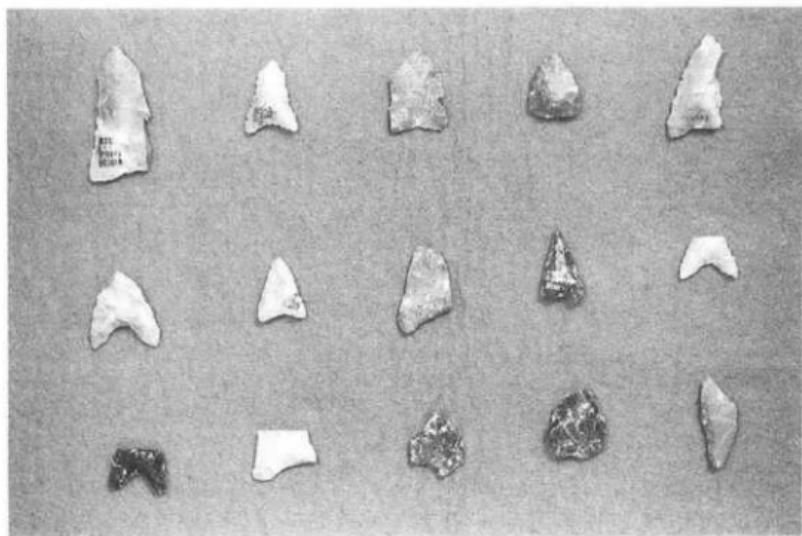
造橋外出土石器（7）

図版 18



遺構外出土石器（8）

図版 19

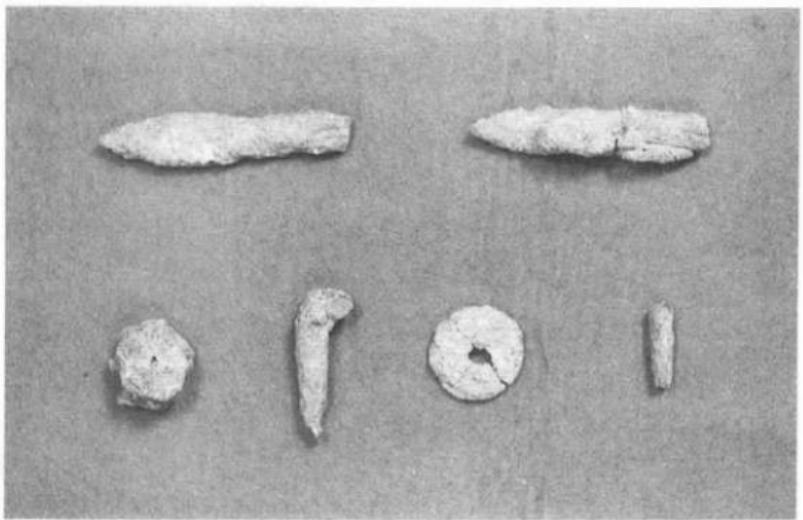


遺構外出土石器 (9)

図版20



遺構外出土石器



遺構外出土鉄製品

図版21



調査風景

---

---

長野県酒類販売株式会社店舗建設に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

六 反 烟 遺 跡

1989年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地  
飯田市教育委員会

印 刷 (株) 龍 共 印 刷

---

